

# 十全同窓会会報

〒920-8640  
金沢市宝町13の1  
金沢大学医学部  
十全同窓会  
編集委員会  
印刷/ヨシダ印刷(株)

## Connecting the dots

医学部長 金子周一



ご卒業おめでとうございます。卒業式の日、ひとりひとりに卒業証書を手渡しなが

皆さんの顔を見ていました。僅かな時間ですが、時空が交差するあの瞬間のあの場所、皆さんの大学生活を思い出しました。きっと金沢における学生生活は楽しかったのでしよう。勉学にクラブに、恋愛にと、青春の日々は瞬く間に過ぎたのでしよう。皆さんの顔に、この海と山との自然に恵まれ、文化の薫る金沢の地で皆さんが得た知識、教養、経験、そして成長を感じました。

同時に、これから十年、二十年後の皆さんの姿も思い浮かべました。お祝いにスタンフォード大学の卒業式でSteve Jobsが行ったスピーチの一節、"Connecting the dots"の話をしました。金沢大学で学んだ医学の知識は勿論のこと、この金沢で経験し

た全てのこと(Dots)は、その時、あ

るいはもしかすると今も無駄だったと思

っていることが実は無駄なことではな

いのです。この青春時代のDotsは長い

にして維持していくのかは大きな課題です。そして、皆さんの在学中に国は医師数を大きく増加する政策へと転換しました。電気、機械、自動車、最近では製薬などの産業に就職した人が国外に出て外貨を稼ぎ、我が国の経済を良くしてきました。そうした産業に比べると、成績優秀な医学部の卒業生は国内にとどまっていた。国内にとどまるどころか、最近では地域にとどまる要求がさらに強まっています。医師不足を解決することは重要です。しかし、日本を代表する皆さんほど優秀な医学部の卒業生が、小きくなりつつある我が国の経済を分け合つて地域に暮らして消費しては、国家として大きな損失ではないかと思うのです。皆さんは長らく豊かな時代を過ごしてきたので、何となくゆとりのある、幸せな雰囲気慣れてしまっているかもしれません。しかし、自分や家族だけが幸せであれば良いという考えを持つとしたら、その幸せを乗せている日本丸は危ういものになりつつあることを知っている必要があります。

### 医学部の卒業生が医療の構造を大きく

転換して、国の経済に寄与することは簡単ではありません。しかし、金沢大学で素晴らしい経験(Dots)をして旅立つ皆さんであれば、小さくまとまることなく、

経済に限らず何か大きく世の中に貢献してくれるような気がします。丁度、愛情に溢れた家庭で育った子供が大きく羽ばたくことが出来るだろうと思う感覚と同じです。小さくても良いのでひとりひとりが「志」をたて、dotsを繋ぎ合わせながら社会に貢献し、皆さんが次なる金沢大学の学生の「心映え」となつて下さい。

平成二十二年  
金沢大学医学部十全同窓会総会

日時：平成二十二年七月三日(土)

午前十時

場所：医学部記念館

一、開会の辞

一、議長選出

一、議長挨拶

一、物故会員に対する黙祷

一、会務報告 理事長

一、医学系研究科報告 医学系研究科長

一、医学類報告 医学類長

一、支部報告

一、議案審議

(一) 平成二十一年度決算

(二) 平成二十二年予算(案)

(三) 役員改選

(四) 会則改正

(五) その他

一、閉会の辞

### 《教授就任講演》

谷内江 昭宏 教授

「血管発生発達病態学(小児科学)

「炎症性疾患の病態評価と早期診断

のためにサイトカイン・プロファ

イリングと細胞解析を駆使したア

プローチ」

長瀬 啓介 教授

「経営企画部

「制度、データと医療経営」

吉崎 智一 教授

「感覚運動病態学(耳鼻咽喉科学)

「頭頸部腫瘍と頭頸部外科」

### 《懇親会》

教授就任講演は、脳科学専攻・がん

医学専攻・循環医学専攻・環境医科

学専攻のUp-to-dateコースを兼ねます。

石川県医師会生涯教育研修会指定を受

けております。多数ご来聴下さい。

十全同窓会会長 佐藤 保

# 病院担当理事就任挨拶

古川 亘



中村信一  
学長就任三年目を迎え、病院担当理事二期目を拝命しました。同

時に財務理事も担当することになりました。幸い、富田前教授（整形外科学）が退任後も特任教授として歴代院長としては初めての三期連続附属病院長に専門職として就任しますので、私の病院での荷重が軽減される分だけ財務に専念できるのではないかと考えています。

さて、国立大学は法人化後七年目に入りました。第一期の中期計画期間中、本学附属病院は順調に稼働を伸ばしてきました。しかしながら病院経営は少しも楽ではありませんでした。病院再開発に要した債務償還金がこの期間、もつとも高額であったことに起因します。毎年減額されてきた大学交付金の1%効率化係数、2%経営改善係数のルールは政権交代により廃止され、償還金の緩和も実現します。さらに二年に一度の診療報酬改正では〇・一九%増となり、中期計画第二期にかける期待には非常に大きいものがあります。この時期にこそ、これまで疲弊した大病院の建て直しをはかり、基盤強化に努めなければなりません。新規大型医療機器購入や、古くなった機器の更新を進めたいと思います。言うまで

もありませんが、大病院は地方における医療機関の最後の砦であると同時に、先端医療技術開発や先進医療推進の役割を担っています。幸い、本学での初期研修医も増えはじめ、これまでの苦労が徐々に報われつつあります。

医学研究科に関する今年度の最重要課題は、第二期臨床研究棟建築の予算化にあります。これは次代の人材育成のための必須の予算であり、決して箱ものではないと考えます。四月、癌研究所は新設された角間キャンパスに移転し、恵まれた環境で再出発しました。今や、金沢大学として最後の老朽化建物となった臨床研究棟建築の予算化を実現しなければなりません。これには石川県の地域医療支援センターが担う総額五〇億円の大型予算である地域医療再生計画ともうまく連動させ、これからの附属病院百年体制を構築したいと考えます。

なお、十全同窓会活動においては、これまで同様、全学の学部・学科単位同窓会やその支部同窓会との連携を維持しながら活性化に努めたいと考えています。二年後に迫った医学部創立百五十周年記念事業への寄付金募集が中心になると思います。並行して、金沢大学創基百五十年事業の一つである全学同窓会、金沢大学学友会創立に向けての準備も進めなければなりません。不安定な社会情勢の折、前途多難が予想されます。会員皆様の暖かいご理解とご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

# 医薬保健研究域・学域長就任挨拶

山本 博



このたび、医薬保健研究域・学域長として推薦、信任、承認される

ところとなりました。ご推挙、ご支持いただきました皆様に御礼申し上げます。医薬保健学域準備室長および同研究域・学域長としての過去四年間の経験を活かし、与えられた任務をはたしてゆきたいと存じます。

金沢大学がいままさに提案しようとしている、新年度からの第II期中期目標・中期計画の冒頭には「研究域・学域のさらなる定着」ということが掲げられております。これからの二年間は、研究域・学域という新しい革袋で、新しいワインが熟成されてゆく、金沢大学の新組織の實質化の時期ともとらえられようかと考えられます。高度な専門性を担保する一方で、豊かな人間性と学際的素養に支えられた「全人的医療」の担い手を育てる、という一見矛盾した現代医学教育の命題、これに対する金沢大学のソリューションが医薬保健学域の設置であったとも位置づけられます。Medizinische (医) のMとApoteker (薬) のAを重ねた意匠がかつて官立金沢医科大学の校章として用いられました。当代のMedical (医)・Pharmaceutical (薬)・Health (保健)の頭文字M、PとHは、このような

学域創設の理念に照らすなら、Meister-Partnership、Humanityになぞらえることができようかと思われれます。すなわち、マイスター性を確保しつつ、連携力と人間性に優れ、最高のチーム医療を推進できる人材の育成と、域内外の活発な人的交流に支えられた学際研究、共同研究、橋渡し研究が医薬保健学域・研究域で推進されるよう希っております。また、研究域・学域づくりは、対応する統合的な大学院研究科づくりとも良好に連携しなくてはなりません。これにより漸く、医薬保健学の分野における、学域という学士教育組織、研究域という教員組織、そして大学院組織の一体化が叶うことになりそうです。一方で、組織や時代、あるいは時の政権がどう変わろうと、大学の力の源は、構成員ひとりひとりの、地道でたゆまない、日常的教育・研究・診療・社会貢献活動にあることも変わらぬ理であります。そういう、かたやある意味でイノベータータイプな、こなたある意味で伝統的基盤的な、二つの要素に想いを致しつつ、微力ではございますが、医薬保健研究域・学域と金沢大学の発展のため献身してまいる所存でございますので、同窓の皆様にはどうかよろしくご指導ご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

## 医学系研究科長・医学系長就任挨拶

松井 修



このたびは医学系研究科長および医学系長に推挙いただきました。金沢大学医学部卒業後三十八年にわたり大病院・医学部と医学系研究科に勤務しましたが、この間、十全同窓会の皆様には診療・研究を通じて支えていただきました。一度は皆様に恩返しをと思い拝命いたしました。大きな責任とともに適性に不安も感じています。

金沢大学は平成二十年四月から三学域・研究域に再編され、旧医学部医学科は医学類と名称を変え医薬保健学域の医学系に属しています。一方、大学院医学系研究科には薬学系の大学院がこの四月より順次移行します。すなわち、創薬科学専攻がこの四月から医学系研究科修士課程に移行し、平成二十四年からは医学系研究科博士課程に薬学専攻が移行・創設されます。もとより薬学と医学は一体でありますし、特に学際領域のチームによる研究や診療がますます重要性をおびてきている今日、当然の改組といえるかと思えます。医学系研究科という名称もそれに伴って替わる予定ですが、実質的なパワーアップを目指して組織を構築していくためのスタートとして重要な時期であると思っています。

医学系研究科、医学系、医学類と附属病院は実質的には一体として日常の教育・研究や診療にあたっていることはご存じのとおりです。またその分担領域の境界も必ずしも明確ではありません。したがって、問題を共有し協力しながら諸問題に取り組んでいく必要がありますが、特に私の主な担当となる大学院教育と研究は地方大学には極めて厳しい状況にあります。なかでも新臨床研修制度に伴う医学部卒業生の都会集中による影響が深刻です。この余波で医学系研究科の定員割れが大きな問題となっています。それに拍車をかけるように臨床系大学院生や教員の診療業務が相対的に激増し研究活動が低下せざるを得ない状況が生まれています。幸いこの傾向には一定の改善の兆しが見えつつありますが、臨床研修と臨床研究をうまく組み合わせる大学院教育・研究を導入し研究科志望者を増やすことが金沢大学の医学系の力の源として最重要課題ではないかと考えています。また、医学系研究科あるいは金沢大学として特色のあるプロジェクト研究や診療を生みだしていくことも地方大学の今後を決定する重要事項でしょう。これらの課題に特に努力したいと思っています。

同窓の皆様にもいつまでも誇りを持っていただけるような金沢大学医学部(類)・医学系研究科を目指して努力いたします。同窓の皆様には今後ともご支援・ご助言をお願いいたします。

## 医学類長就任挨拶

井関 尚一



このたびはご推挙を受け、医学類長に就任いたしました。私にとつて平成

二年の教授拝命以来二十年の節目にあたり、医学教育に責任を持つとともに松井医学系長に協力して医学系の運営に関わることに、身の引き締まる思いです。本学では慣れ親しんだ医学部の名が医薬保健学域医学類に変わりましたが、医学教育の内容も大きく変化しました。一つはコアカリキュラムに基づく教育目標の標準化であり、四年次末に学生の到達度を判定するCBTが、また卒業前には統合試験が行われています。もう一つは卒業前における臨床能力育成の重視であり、四年次末にOSCEが、また六年次前期にはクリニカルクラックシップが行われています。臓器別講義やチュートリアルなどは、教科の枠を超える教育です。これらは、学生の目標の明確化とモチベーションの維持に役立つ一方で、試験対策を優先した勉学の浅薄化や、実用性の重視と学問体系の軽視につながる恐れもあります。基礎医学出身の私としては、各教科の教員が医師国家試験対策や学生の思惑に迎合せず専門の学問を堂々と教授し、成績判定を毅然として行うことも必要と考えています。

次に入試においては、金子前医学類長のご尽力により、後期日程が廃止されて推薦入学が導入され、また県の協力による地域枠が設けられました。これらは現役合格者ならびに地元志向者の獲得という大きな意義を持ちます。今後はさらに学士入学や面接試験の見直しなどを行ってまいります。

卒業研修においては、必修化により落ち込んだ本学附属病院の初期研修者数が、プログラムの見直しなど関係者の努力の結果、今年度は大幅に増加しました。一方、大学院進学者数は、中沼前医学系長のご尽力により回復しつつありますが、まだ十分とは言えません。学生の研究マインドを涵養する必要が痛感されます。

宝町キャンパス整備については、国の財政難から予算措置が足踏みしています。今年度に総合臨床研究棟の建設が本格化します。金沢大学施設部によるプロムナード等の整備計画も示されています。本学の宝であるキンストレーキは、山本医薬保健研究域長のご尽力で専門家による修復がなされ、見違えるように美しくなりました。同窓会からも多大なご援助を賜りました。

最後に、私は本学の卒業生ではありませんが、父が昭和九年に旧制金沢医大を卒業したこともあり、本学には特別な思いを持っております。創立百五十周年記念事業等に対する同窓の皆様の一層のご理解とご協力をお願い申し上げて、就任の挨拶といたします。

ご挨拶

# 整形外科科学教授退職挨拶 金沢大学附属病院・病院長就任挨拶

整形外科科学 富田 勝郎

先日は、十全同窓会の先生方には盛大な退職記念式・宴の会を催してくださいまして誠にありがとうございます。心からお礼を申し上げます。

さて、私の医師人生を大雑把に振り返ってみますと、昭和三十八年（一九六三）、北陸豪雪を掻き分けて金沢大学医学部に入学し（十八歳）、昭和四十四年（一九六九）、インターン反対闘争のさなかを掻いぐるように卒業しました。当時は交通事故の華やかなりし時代でしたので、骨折外傷の整形外科開業医を目指



して高瀬武平教授のもとに入局し、「骨肉腫の研究」で医学博士号をいただきました。その流れで二代目の野村進教授からアメリカ留学（Bethesda）の機会をいただき、ここでがんの化学療法のはしりを学びました。帰国後、開業の準備を考慮に入れて脊椎の分野にも手を広げ（二足のわらじ）、手術に夢中になっているうちに、結果として医局長三年、助教を四年務め、平成元年（一九八九）、野村教授の後を受けて三代目の教授（四十四歳）として教室を任されることになりました。以後、我が身の丈にそぐわない大きな重責に狼狽しつつ「医の心・おもしろい心」を旗印に「全力疾走＋無我夢中」で奮闘した甲斐があつてか、教授在職二十一年の間に一九八人という数多くの整形外科医が入局してくれました。おかげで、脊椎・脊髄グループ、骨腫瘍グループ、関節グループ、手・足の外科グループ、スポーツ整形グループ、外傷・足変形矯正グループなどが活発化し、また小生自身としてはライフワークとして「脊椎がん全摘術の開発」に全力を傾注することができました。それらの勢いをもとに平成十五年（二〇〇三年）五千人もの医師が集う日本整形外科学会を金沢の地で開催することができましたことは、地方都市で

は無理とささやかれていただけに最大の喜びでした。さらに教授職最後の四年間に、予想外にも二期の金沢大学附属病院・病院長を務めさせていただきました、本当にありがとうございます。

今年、平成二十二年三月をもって教授職を退職することになりましたが、ここに至るまでの金沢大学医学部及び附属病院を中心とした長い道のりも、振り返ってみれば「池塘春草の夢の如し」の思いです。はつきりと言えることは、その時々々の恩師、先輩・同僚・後輩、各界、各職域の多くの皆様に教えられ助けられながらであつたからこそ、私個人の能力以上の力を発揮することができ、ここまで迎えてくることができたと感じており、感謝の気持ちでいっぱいです。

なお退職後、改めて特任教授というポジションで四月一日から、金沢大学附属病院・病院長 兼、整形外科医として任務兼 診療に従事することになりました。もちろん金沢大学附属病院の収支が金沢大学全体の四〇％余を占めているという「現実」と「病院に寄せられている大きな期待」を見据えながら、大学病院の使命と健全経営、職員の待遇向上などに向けて皆様とともにがんばっていきたくと思っています。さらに、選んでいただきました皆さんの期待に応えられますよう、所信通り「研修医・医師の生涯教育」と「地域医療の支援の具現化」、「高次人間ドックのスタート」に向けて道を切り開いていきたい、と思っています。懸案の臨床研究棟の建設に向けても医学系の案件とはいえない協力を惜しまないつもりです。

今後ともよろしくご指導ご協力くださいますようお願い申し上げます。

## 富田勝郎教授 退職最終講演会・記念式開催

平成二十二年三月六日（土）、平成二十一年度をもって定年退職された富田勝郎教授の最終講演会と記念式が医学部十全講堂と記念館で盛大に開催された。

最終講演会では富田教授は「一整形外科医の道のり——脊椎がん全摘術」…未知への挑戦も医の心から」と題し、先駆的な整形外科手術に関する講演をなされた。感銘深い講演であり、現在の金沢大学機能再建学研究分野の隆盛を築かれた研究内容であり、多くの聴衆を魅了した。また記念式では、中沼安二実行委員長長の式辞、中村信一金沢大学長針田哲石川県健康福祉部参事（谷本正憲知事代理）、佐藤同窓会長の祝辞に基づいて、退職された富田教授から挨拶があつた。つづいて記念品・花束の贈呈、佐藤同窓会長の発声による乾杯の後、祝宴に移った。金沢大学内の先生方、職員、同窓・同門の先後輩や教え子たちとの交歓は名残尽きず、約一時間半が瞬く間に経過し、古川金沢大学理事の音頭による万歳をもって盛会裡に散会した。



（医学系長・医学系研究科長

中沼 安二 記）

教授 就任 挨拶

土屋弘行博士 (昭和五十八年卒業)

整形外科教授に就任



平成二十年四月一日付けを持ちまして、大学院医学系研究科・医薬保健

学域医学類機能再建学(整形外科学)講座教授に就任させていただきました。整形外科教室は一九五三年に開講し、私が第四代目の教授となります。初代高瀬武平教授、第二代野村進教授、第三代富田勝郎教授に培われた整形外科教室

三浦克之博士

(昭和六十三年卒業)

滋賀医科大学教授に就任



この度、平成二十一年十二月一日付けで滋賀医科大学社会医学講座(公衆衛

生学部門)教授を拝命いたしました。私は昭和六十三年に金沢大学医学部を卒業

は、時代のニーズに応え飛躍的な発展を遂げ、同門会員数も四一〇名を数えるま

高齡化社会に向かつている日本にとつて、運動器医療の果たす役割には大きなものがあります。天寿を全うするまで、生活の質(QOL)を維持することがきわめて重要になってまいりました。また、その一方で、老若男女を問わず健康増進を目的としたスポーツ振興があり、運動器医療にかつてないほどの注目が集まっております。整形外科の守備範囲は大変広く、骨折・外傷、関節疾患、脊椎・脊

後、金沢大学医学部第一内科(服部信教授)に入学し、翌年、金沢大学大学院(公衆衛生学)に入学し岡田晃教授のご指導で平成五年に学位を取得しました。その後、金沢医科大学健康増進予防医学部門にて中川秀昭教授(昭和五十年卒業)のもとで循環器疾患の疫学研究の研鑽を積み、助手、講師、准教授を務めました。この間多くの疫学共同研究でご指導いただいた滋賀医科大学社会医学講座上島弘嗣教授(昭和四十六年卒業)のもとに平成二十年准教授として着任し、この度後任の教授に就任いたしました。

当講座では前任の上島教授がNIPPON

髓病、骨軟部腫瘍、骨系統疾患、末梢神経疾患などに加え、小児整形外科、手足の外科、リハビリテーションなどの領域もあります。これらの領域において、高度先進医療を開発しその標準化を行っていき、レベルの高い医療を提供していきたいと思えます。学内連携、産官学連携、地域医療連携はもちろんのこと、先端医療を創成して金沢の地から世界へ向けて発信していく所存です。

金沢の雪と文化と金沢城に憧れて金沢大学に入学し、弥生の北溟寮で苦節六年を過ごしたことを大変懐かしく思います。伝統ある母校、金沢大学で指導者として医学教育、研究、診療に従事できる機会を愚生に与えてくださったことに深く感謝いたしております。金沢大学の益々の発展に向けて邁進する決意です。十全同窓会の諸先生方のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

DATAをはじめとする循環器疫学研究、国際共同研究等を国内外の研究者とともに築かれ、世界的にも貴重な財産を有しています。疫学研究は長い時間と多大の労力をかけて初めて成果を生むものですので、これをしっかりと引き継ぎさらに発展させて、わが国の循環器疾患・生活習慣病予防のためのエビデンスを発信してゆきたいと考えています。今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

春の叙勲

瑞宝中綬章

塚田 貞夫

(昭和三十二年卒業)

旭日小綬章

浅野 定弘

(昭和四十二年卒業)

瑞宝小綬章

元田 憲

(昭和三十四年卒業)

瑞宝双光章

柳瀬 茂宣

(II会員)

第三十八回医療功労賞受賞

波佐谷 兼綱

(昭和四十三年卒業)

万が一遺漏がある場合は御寛恕の上お知らせ頂ければ幸いです。

## 新がん研究所棟竣工

がん研究所は一九六七年に設立され、結核研究所と医学部附属癌研究施設とが合併するとともに、米泉地区に附属病院を置きました。一九六九年に基礎研究部門の建物が宝町地区に新築されました。金沢大学総合移転計画の当初案では、基礎研究部門とともに附属病院も角間地区に移転する予定でしたが、一大学一附属病院という国の政策により、診療部門は二〇〇一年に医学部附属病院に統合され、臨床研究分野は宝町キャンパス内の医学部A棟に移り、現在に至っています。



がん研究所の建物は築四十年を超え、老朽化が目立つことから、総合移転の二次計画の掉尾を飾る形で、角間南地区での新棟着工が二〇〇八年度認められました。着工決定から二年余りの間に起きたリーマン・ショックや民主党政権の誕生などの経済・政治情勢の激変の中、本年二月に竣工、三月には移転が無事に終了いたしました。これも、大卒本部のご支援とともに、学内外の多くの十全同窓会会員のご支援の賜物と、

心より感謝している次第です。

がん研究所の新棟は、杜の里方面から来ると、角間南地区では一番手前に、自然科学系図書館に隣接して建てられていて、外壁は旧四高校舎を模したレンガ色に彩られています。設備に関しても、建物内に約二五〇〇ケージのマウスの飼育が可能な動物施設が設置されるなど、文科省から附属研究所に対して求められている共同利用・共同研究拠点形成にも十分対応できるものとなりました。この新棟竣工と期を一にして、「転移」「薬剤耐性」の克服を目指して、がん研究所は「がん幹細胞研究プログラム」「がん微小環境研究プログラム」「がん分子標的探索プログラム」「がん分子標的医療開発プ

### 受賞

#### 櫻井 武教授

##### 第十四回安藤百福賞

##### 「大賞」受賞

私は一九九八年にテキサス大学留学中に新規神経ペプチドであるオレキシンを発見し、その後、オレキシンの生理機能が摂食行動や睡眠・覚醒の制御など私たちの生活に密接に関連する生理機能に関与していることや、オレキシンの関与する神経回路を明らかにしてきました。とくにエネルギー恒常性や大脳辺縁系との関連を明らかにし、全身のエネルギーが足りない場合や、食物を認知することによってオレキシシン産生ニューロンが活性

プログラム」からなる四プログラム制へと改組いたしました。

がん研究所の初代所長である岡本肇先生は、がん克服を目指し、当時まだ黎明期にあつた分子生物学をがん研究に取り入れ、本研究所を設立されました。このような斬新な構想とともに、十全同窓会の会員の皆様方の設立以来変わらぬご支援が、数多くの国際的レベルの研究成果を本研究所が生み出すことに繋がったと考えています。移転を契機に、未だ途半ばのがん克服という大きな目標の達成に繋がる研究成果を挙げるよう、研究所所員一同、努力する決意を新たにしております。宝町地区に残る研究分野はもちろんのこと、角間地区に移転しました研

化する、そして、それが摂食行動に必要な覚醒レベルを保つために必要なことを見いだしました。今回は、これらの業績を通して、「食が覚醒などの精神状態にも影響を与えること」そして、「食欲と睡眠が密接な関係にある」という新しい視点を与えたことを評価していただき、受賞の光栄に浴しました。

故安藤百福氏は、インスタントラーメンの発明者であり、日清食品の創業者です。その開発は、食糧難の時代に、「食足世平」（食が足りてこそ世の中が平和になる）との思いから苦闘の末に成し遂げられたものでした。氏は、四十八歳の時に全財産を失ったことをきっかけに独力で「チキンラーメン」を発明、さらに日清食品という今日では世界的な大企業となる会社を設立されました。六十一歳で「カップヌードル」を発明、九十五歳の時に宇宙食ラーメン「スペースラム」

究分野に対しても、会員の皆様方の一層のご指導・ご鞭撻とともに温かいご支援をお願いする次第です。(向田 直史 記)



を開発されるなど、常に前進を求めて探求される姿はわれわれ研究者にも深い感銘を与えます。

本賞は、安藤百福氏の「食創為世（食を創り世のためにつくす）」との理念に基づき創設された「食創会」が行なう表彰事業で、(財)安藤スポーツ・食文化振興財団が主宰しています。安藤氏は、会の活動を脳神経生理学の世界的権威である伊藤正男先生(食創会会長)に一任され、私のような基礎研究者も含め「食を科学する」大切さを理解し、新しい食品の創造・開発や食文化の向上・発展に貢献されてきました。基礎研究者が、「食文化」というもつとも多くの人が触れる分野の賞をいただきましたことは、強い励みになりました。受賞に恥じることない研究を続けるよう、今後とも精進いたします。

# 医学類定員増員の現状と将来

医学類長 金子周一

## 医師養成数の方向転換

昭和五十七年に「医師については、全体として過剰を招かないように配慮し、適正な水準となるよう合理的な養成計画」とする閣議決定があり、昭和六十一年に厚生省の「将来の医師需給に関する検討委員会」の意見として「平成七年を目処として医師の新規参入を最小限一〇%削減すべき」とされてきた。さらに平成九年の閣議決定で「大学医学部の整理・合理化も視野に入れつつ引き続き医学部定員の削減に取り組む」とされた。事実、昭和五十六年に八、二八〇名の定員は平成十九年の削減後七、六二五名となった。

しかし、新医師臨床研修制度が導入された平成十六年頃から、病院を中心に医師不足が明らかとなり、医療崩壊という言葉が聞かれるようになった。その理由はいくつも指摘されているが、病院勤務の医師が少ない中において、大学が地域医療を支えていたことは事実であった。

平成十八年八月、地域医療に関する関係省庁連絡会議は「医学部における地域枠の拡充」「医師不足県における医師養成数の暫定的な調整の容認」を、十九年五月に政府は「緊急医師確保対策」を打ち出した。しかし、この時点でも定員増は暫定的なものであるとしていた。ところが、平成二十年「経済財政改革の基本方針二〇〇八」において「これまでの閣

議決定に代わる新しい医師養成のあり方を確立」「早急に過去最大程度にまで増員する」と大きく方針を転換した。そして、平成二十二年度の定員は八、八四六名となった。

## 定員増に対する金沢大学の対応

研修制度が導入されてから卒業生は出身地や大都市にいくことが多くなった。卒業生を地元に残すために、全国の大学において地域枠が設けられた。私が医学部長になった当時、金沢大学においても地域枠を設けた方が良いとする意見があった。しかし、私を含めて多くの教員は単純な地域枠の導入は大学のレベル低下につながりかねないと考えて導入を行わなかった。

緊急医師確保対策が登場し、都府県ごとに最大五名まで奨学金を設定して医師確保を行う定員増が可能となった（特別枠）。大学のレベル低下をさげたいと考えていた旧帝大や旧六の多くの大学も参加することとなった。石川県においては金沢大学が五名の定員増となった。さらに経済財政改革の基本方針を受けたさらなる定員増で、平成二十二年から石川県から新たに五名（合計十名）、富山県から二名が増加となった。これによって医学類の定員は一一七名となり、過去最大の一二〇名に近い定員となった。

## 金沢大学における独自の取り組み

政府の方針が次々に変わるために、文

科省、厚労省、県も混乱した。これを受ける大学側も平成十九年、二十年、二十一年と対応に追われた。その中であつて、いかに優れた学生を獲得するか、さらに奨学金には返還期間が設定されているために、返還期間にいかにして良い医師を育成するかは制度設計が課題であった。各都府県の対応は様々である。

金沢大学では三つの大きな制度設計を行った。ひとつは現役生に限り、なおかつ、全国どこ出身であつても応募出来る仕組みとした。二つ目は選抜方法の設計であつた。その頃、医学類では後期試験を取りやめて、前期試験の前に一般推薦入学を行うという大きな入試改革を進めていた。そこで、奨学金を受ける特別枠の学生は、選抜されない場合でも一般推薦入学に回ることが出来ること、さらに、それでも選抜されない場合は前期試験を受験出来るように設計した。これによって就学資金が無いから奨学金を受けるのではなく、優秀な学生であるから奨学金を受け取るということになった。三つ目の取り組みは、卒業後も石川県の奨学生は金沢大学で初期臨床研修を受け、その後も、県内の基幹病院を研修するなどとして、医師の使い捨てにならない、良い医師を育成する研修とした。

この複雑な制度を理解してもらうために、富山・石川・福井の進学校の担当者をごちからから訪ねて説明をした。幸いなことに、少なくともこの二年間は優秀な学生を獲得することが出来た。この制度を設計するために県の理解が不可欠であった。県も大変な対応であつたと思われ、改めて感謝を申し上げたい。福井県と富山県にも関連病院が多いため、両県とも話し合いをして進めてきた。また、石

川県は関連して地域医療教育学講座を設置した。

## 医学類定員増の将来

現在の定員増は、過去最大程度にまで増員する」とした先の与党がまとめたものに相当する。民主党はマニフェストに「年金制度を一元化し、月額七万円の最低保障年金を実現します。後期高齢者医療制度は廃止し、医師の数を一・五倍にします」と大きく太文字で記載している。説明に「医学部学生を一・五倍に増やし、医師数を先進国並」とある。医学部の学生定員を一・五倍に増やすともとれる。しかし、全国医学部長・病院長会議は、この三年間で一、二二一名が定員増となつていること、これは十二・一三の医学部を新設したことと同じであることを述べている。医師養成数を一・五倍とすると、今年入学した学生が卒業する年のわずか六年後にはマニフェストの目標値である経済協力開発機構（OECD）平均に到達し、約十年を待たずに世界一の医師数に達すると計算し、民主党に定員増に対して慎重な対応を求めている。

医師数は今でも、年に四、四〇〇人程度増加している。石川県の人口を我が国の一%と単純に計算すると十年後に四四〇人の医師が県内に増えることになる。県内の病院の数から十年後の様子を想像していただきたい。これが日本全国で起きる。あまりに性急な定員増がいかの問題であるか誰でも想像できる。たまたまこの四年間に渡って医学部長・医学類長と入試改革を担当させていたが、政府の考えることに大きな不安を覚えている。改めて、金沢大学は優れた医師、研究者を養成しなければ、卒業する学生が可愛そうだと思つている。

# 会報創刊のころ

## 津川洋

### 三(昭和二十四年卒業)

「十全同窓會々報」は昭和二十五年十一月十日に創刊された。編集発行人、倉知与志。タブロイド版四頁。あとがきには

…学術会議選挙に合わそうと、フルスピードの編集。…スタッフは宮田栄副会長を編集長に、矢部健治(石丸解剖・津川洋三(放射線)の「北陸学生新聞」以来の懐かしのコンビ。ただ母校と皆様をつなぐさやかな伝書鳩たれかしと願うのみ…とある。

これは同級の矢部健治君(昭和二十四年卒業)が書いたもので、あれから六十年。今となつては当時を語るものは、津川洋三と、会報十二号以降編集委員の、われわれより二級下の寺畑喜朔君(昭和二十六年卒業)だけとなったので書き残しておくこととしたい。

ここで学術会議選挙というのは、翌月の十二月十日に行なわれる第二回選挙のことで、本学からは全国区公衆衛生に戸田正三金沢大学長、京大名誉教授。中部地区から大谷佐重郎教授(公衆衛生)、全国区基礎医学で日本ブラッドバンク役員の本木秀雄氏(細菌学、昭和八年卒業)が候補補している。

中央の大学と比べ地方の大学の不利を除くため、学閥問題も含め是非とも当選させたく会報の発刊が急がれたわけである。

倉知与志教授(眼科・昭和七年卒業)は十月十五日の同窓会総会で、宮田栄

授(病理・昭和二年卒業)のあとを受け理事長に新任されたのであるが新聞の社説にあたる論説欄に「十全会々報発刊に当つて」と題し、次のように述べている。

母校の淵源は古く、すでに卒業生は三千名以上になる。従つて十全同窓会の歴史も浅くはない。もと、十全会の名で、学友会・医学会・同窓会の諸性格を一本にした会であつたものを、同窓会が独立経営するようになったのはしかしそう古いことではない。…

由来、同窓会といえば母校の隠然たる後楯であり、卒業生活躍の基盤であることは申すまでもない。…同じ学舎に相つどつた同窓生の手を握り、共に語り合いたいという美しい心情である。その一助としてこの会報は生れたのである。

十全同窓会が結成されたのは昭和七年九月である。新理事長倉知教授は昭和七年卒業だから、その年である。前年の昭和六年までの卒業生は、平成二十二年五月発行の同窓会名簿により調べると、一九〇三名。以来、十全会から十全同窓会が分離独立した。

ところで、昭和七年(一九三二)とはどんな年であつたか。

前年の昭和六年に、中国では柳条溝の鉄道爆破事件が起き、日本陸軍の関東軍は中国軍を攻撃して旧満州全土を占領、七年には上海にも戦火が飛び、満州国の

独立をはかった。五月、陸海軍青年将校が犬養毅首相を暗殺し、政党は無力となり軍部が勢を増した。いわゆる五・一五事件である。

一方、大学の方では欧州依存の状態から、わが国独自の学問の進歩が見られるようになってきている。

たとえばこれまで縦書きだった十全会雑誌が、昭和六年から横書きとなり質的な記述の時代を脱して数量的な実験の時代に入った。

医学のみならず、文化技術のあらゆる面にわたり独り歩き出来るようになり、日本人の自尊心が著しく高められてきた時代でもあつた。

ここで金沢大学医学部と関連のある医療機関その他に多く冠せられている「十全」なる語はいつごろから用いられるようになったのか。一寸あたつて見よう。

中国周代(紀元前一〇〇〇〜二五六)の官制を記した書である「周禮」にその記述がある。

十全とは完全なこと、全く欠点のないこと、でありこの周辺には上医・中医・下医という言葉もでてくる。

上医は、都市環境や生活環境を整備して健康保持を行なう。

中医はメタボ対策や予防医療を行つて疾病の発病を予防する。

下医は疾病にかかった人を治療する。というのである。

昭和二十年代、医師に対する紹介状や返書には、医師に対する敬称として

〇〇国手殿 玉案下 などと実際に書かれ、また書いたものがある。

#### ☆十全會名の出典

程子曰。周官医以十全为上。非十人皆癒为上。若十人不幸皆死病則奈何。但知可治不可治者。十人皆中節即为上。

(周礼)

歳終。則稽其医事以制其食。十全为上。

十失一次之。十失二次之。十失三次之。

十失四次之。十失五次之。

十失六次之。十失七次之。

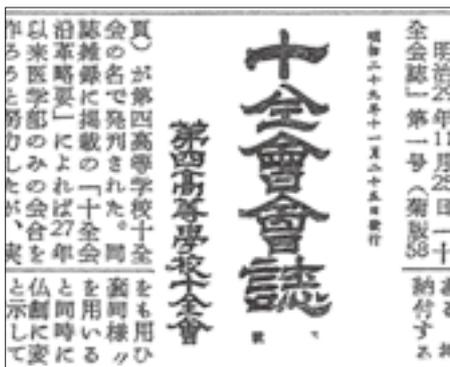
十失八次之。十失九次之。

十失十次之。十失十次之。

(周、天官)

十全会雑誌61号より(明治43年12月3日号)

なお「十全」の初出は、明治二十九年十一月二十五日第四高等学校十全会から発刊された「十全會會誌」第一号(菊版五十八頁)である。



話を元に戻す。

昭和七年三月に「学窓」第七号が出た。肩の凝らない医学評論や随想、同窓生の戦地からの便りなどを載せ一八八頁の縦書きである。発行人は原進一郎とあるが名簿に名前はない。発行所は金沢医科大学十全会とある。また昭和二十五年五月には復刊第一号学芸雑誌（通巻二十一）は、金沢医科大学十学生会自治会からである。あとがきに

同窓会誌もない現在、ただ学生のために終らせる事なく、諸先輩にも働きかけて相互の親密をはかりたいと思っている。

編集発行人は、竹中恒夫（昭和二十七年卒業）当時学生。また昭和二十六年十二月発行の通巻二十三号は金沢医科大学十学生会、となつてゐる。

長くなつたが同窓生からも学生からも、会報の出版が切望されていたのである。

こうして創刊された会報は年四回の出版で第五・六合併号（昭和二十七年六月十五日）の論説には

昭和七年九月に十全同窓会が発足して以来、ここに二十周年を迎えた。我が国にとつて未曾有の波瀾多き時代であつたにも拘らず、何ら災害を受けなかつた校舎で、無事祝賀の総会を開き得たことは御同慶の至りである。と述べている。

さて冒頭に引用した会報創刊号のあとがきのところで、矢部健治は「矢部健治・津川洋三は、北陸学生新聞」以来の懐かしのコンビである、と書いてゐる。

この辺のことを少し書きたい。矢部はわたくし津川より五年年長の大

正九年、金沢市で生まれ昭和十三年旧制弘前高校に入学、十七年卒業後、現役兵となり、昭和十九年硫黄島に上陸、右下腿爆弾破裂創で、このままなら切断を余儀なくされるところを上官の折口春洋中尉（折口信夫―民俗学者―の養嗣子）のからいで内地に帰還、療養することとなる。戦後、金沢医大に入学、石丸解剖学助教の後、北海道網走市で十全耳鼻科医院を開業、網走山岳会々々長なども勤め、平成元年肺がんで死去した。享年六十九歳。

彼は身長一八〇センチの大柄で酒豪、酔うほどに声が大きくなり、マルクス、エンゲルス、ヤスパース、ハイデッガーと、豊富な知識と体験を披露。聞くものを煙に巻いた。硫黄島で負傷、帰還にあたり春洋中尉は感情の美しい青年、として父信夫に手紙を託している。豪傑というべきか壮士というべきか。

彼は昭和五十七年十全同窓会報六十六号に「十全同窓会報創刊のころ」と題し次のように書いてゐる。

昭和二十五年十一月十日創刊号の共同編集にあつた津川洋三君（共に二十四年卒業）と私の深いつき合ひは、二十一年六月に発足した金沢学生連盟に始まる。……その組織の中核として月二回刊行の「北陸学生新聞」が北陸三県の大学高専生を対象に、二十一年九月十五日に創刊号を出した。

これより先、北國新聞社の嵯峨保二社長、鴨居悠主筆らはわれわれの趣旨に賛同し、新聞概論、機構、製作、整理、取材、広告、経理などにつき講義、援助してくれた（津川注）

このような素地があつたので、二十五年十月十五日の同窓会総会で、新たに副会長に就任された宮田栄先生、新理事長になられた倉知与志先生から、会報創刊の御相談をうけた際、タブロイド四頁、年四回の発行なら、津川、矢部の両名で充分ですとお引受けした記憶がある。

当時、宮田先生は四十六歳、倉知先生は四十五歳の気鋭の教授であられたし、私達兩名は国家試験にパスしたばかりの教室一年生であつたから、編集はたちまち軌道にのり、母校のニュースと各地の同窓生の動きをバランスよくのせること、連載シリーズもの（同窓生風土記、クラスルーム、回想記、母校にのぞむ、など）を設けることで編集を終つた。

同窓会活動に活を入れ、虚脱から飛躍へ、これが会報の任務である。

昭和二十年から二十五年ごろまでの内外の情勢を書いてみよう。

昭和二十年八月十五日敗戦、二十一年新憲法発布、二十三年極東軍事裁判、東條首相らA級戦犯の処刑、二十四年、湯川秀樹博士、ノーベル物理学賞受賞、二十五年朝鮮戦争、二十六年、共産圏を除いて四十八ヶ国と講和条約を締結、など。

大学の方は敗戦以前、講義そつちのけで、われわれは臨床棟と基礎棟を繋ぐ渡り廊下を延焼を免れるためとして鶴嘴で打ち壊した。

講義はみな脚絆をつけて受け、前線に出征してすぐ役に立つようにと速成の外科、繃帯の巻き方などを教えられた。

七月に入り組織学の講義中、空襲警報

が鳴り、爆音を聞いた。

「まもなく夏休みに入り、二学期の始まるころは食糧事情は極端に悪く、今の若い人には想像もつかないだろうが、親たちは家の宝ものや着物と交換に、生きるためのお米や諸の買出しに精を出した。家を空襲で焼かれた人その他で帰つて来られない人も多かつた。

そんな中、戦野にあつた学生が帰学してくる。復員学生である。中には新入学生もいた。

カーキ色の、軍隊のときの服を着て、革製の半長靴を穿いてドタバタと昨日二人、今日一人と教室に入ってくるのである。その中に矢部君もいた。それでわれわれの定員八〇名のクラスは、卒業時一〇三名になつた。

一方、町には都会から疎開していた文化人が多く、その人たちや、四高の文化系の先生が中心となつて研究会、講演会が頻繁に催された。

文芸色の濃い総合誌として、文化団体、石川文化懇話会の大澤衛（四高教授、トーマス・ハーディの研究者）西義之（独文学）小杉伸六（映画評論家）また園部六三郎（北國新聞社文化部）らによつて昭和二十年、雑誌「文華」が創刊され、地方文化の再興と発展に寄与した。宮田栄先生も執筆、わたしも創作を寄稿したりした。

北陸学生新聞の話に戻るが、矢部君一流の流儀から、今度学生新聞を出す、と言ひ出すのである。

金沢の中心部、香林坊の現在のアトリオ大和デパートの位置にあつた建物の三階の「魚半」の一室に呼び出され一緒に新聞を出さないと誘ひを受けた。

非常に懇懇丁寧にお辞儀をされて、そのころ、金沢医大文芸雑誌を復刊しようといささか動いていたわたしは何となく承諾してしまった。それが彼との出会いであった。

学業そっちのけの記事作りはかなりきつかった。市内の学校から委員を出して貰い、映画、絵画、文芸その他サークルをつくり矢部君宅に集まり編集した。創刊は二十一年九月十五日で、終刊は二十三年五月二十三号であった。

いろいろ思い出す。十全同窓会会報創刊の前夜、倉知先生宅に矢部君とわたしと招かれお酒が出たものだから彼は上機嫌、手振り身振りよろしく熱弁、倉知先生も終始楽しく満悦であった。

倉知先生が理事長になられるバックには宮田栄(病理) 岡本肇(結核研) 早稲田正澄(生化学) 岡良一(市長) 渡辺四郎(病理) 平松博(放射線) 石崎有信(公衆衛生) といった本学出身の教授・助教授の強力な下支えがあったとわたしは思っている。

同窓生風土記をとるために泊りがけで富山、大阪へ出掛けたことも懐かしい。本年平成二十二年一月十五日号は佐藤保会長のもと編集委員の方々のご努力で第一四四号を重ねており、ご同慶の至りである。

平成二十四年には、加賀藩種痘所の開設から数え金沢大学は創基一五〇年を迎える。

金沢大学に学んだことを誇りとし稿を終える。

(平成二十二年一月二十七日)

## 学会報告

### 第十九回 日本メイラード学会

去る平成二十一年十一月二十、二十一日の両日、金沢香林坊にあるエクセル東急金沢において第十九回日本メイラード学会が血管分子生物学・山本博教授および北陸大学薬学部・竹内正義教授の共宰で開催されました。

このメイラード学会の「メイラード」とは、フランスの食品科学者の名前 Maillard を由来としています。一九二一年、Maillard は世界ではじめて非酵素的なタンパク糖化反応を報告しました。これ以降、タンパク質と糖が、シフ塩基形成、アマドリ転移を経て、不可逆的な後期糖化反応生成物 (AGE) の形成に至る反応のことをメイラード反応と呼び、色、味、香りなど食品の風味の構成に重要であることから、主に食品科学・栄養学・農学・発酵学などの分野でさかんに研究されてきました。一九八〇年代に至り、生体内でもこのようなメイラード反応が起こっていることが米国の Calzavara 博士らによって報告されました。生体内においてのメイラード反応は時間の経過に伴って進行し、その反応物が蓄積されるといふことより、加齢現象を説明する重要な一つのメカニズムとも考えられています。病態として AGE の形成と蓄積が加速的に進行するものの代表が糖尿病です。糖尿病患者における血糖コントロールの最も信頼できる指標であるヘモグロビン A1c はグロビンβ鎖のアマド

リ糖化化合物です。現在、AGE は糖尿病および糖尿病合併症のみならず、動脈硬化、がん、炎症、アルツハイマー脳症、統合失調症などさまざまな疾患と関係づけられてきています。さらに、私たちの体内に存在する AGE の少なくとも一部は食事由来つまり食品に由来することがわかっています。メイラード学会とはこのようなメイラード反応に関する研究を行う研究者・学生を会員とする学会で、食品科学・栄養学・農学の分野と医学の分野を含めた幅広い領域からの研究者が、積極的に情報、意見の交換を行う場であります。(学会ホームページ <http://www.maillard.unin.jp/>)

今回の第十九回日本メイラード学会では、全国から例年を凌駕する一五名の参加者と二十六題の一般演題発表があり、盛会裡に最新の知見の発表と活発な



情報交換および人的交流が行われました。医学・食品科学各分野の第一線研究者が一堂に会したパネルディスカッション、教育講演、ナイトセッションなどを通して、異分野間の連携や共同研究推進への機運がさらに高まったと思っております。

最後に本学会開催にあたりましてご支援、ご協力を賜りました金沢大学関係、当大会事務局のスタッフの皆様方に改めて心より御礼を申し上げます。(山本 靖彦 記)

### 第五十四回日本生殖医学 学会総会・学術講演会

二〇〇九年十一月二十一―二十三日、第五十四回日本生殖医学学会学術講演会を石川県立音楽堂、ANAクラウンプラザホテル金沢にて開催いたしました。本学会は一九五六年に設立された伝統ある学会で、会員数は約五千名です。学術講演会は、国内外の生殖医学に関わる医師、基礎研究者、生殖医療技術者が一堂に会する集会です。今回の学術集会は泌尿器科と産婦人科とが共同企画した初の集会であり、共同開催をアピールするため、学会テーマを「生殖医療 ― 男と女のハーモニー」としました。

特別講演は再生医療技術の最先端をヒトに近いサルからアプローチした「生殖・再生医療研究におけるサルの有用性」と題し滋賀医大動物生命科学センター・鳥居隆三先生にお願いしました。招請講演は米国セントルイス不妊センター・Silber 先生「Ovary Transplantation」



米国ノースウエスタン大学Bain先生 [Endometriosis]、ギリシアイオニア大学Sofkitis先生「P.D.F.5阻害剤と生殖」、韓国ソウル大学Park先生「精密静脈瘤の最新話題」、イタリアフィレンツェ大学Zanus先生「Y染色体と不妊」の五題があり、世界トップレベルの先生から最新の知見をご教授いただきました。教育講演は「産婦人科専門医から見た男性不妊症」、「男性不妊とその要因」、「生殖生理とアロマターゼ」、「多嚢胞卵巣の形態形成における内分泌調節」、「生殖医療管見」、「生殖腺の発生と性分化のメカニズム」の六題、「最先端不妊治療の現状と将来」と題して要望講演もありました。シンポジウムでは、「第三者配偶子を用いる生殖医療」、「癌患者と生殖医療」、「婦人科がんの妊孕性温存治療」、「低侵襲性排卵誘発の有用性と問題点

などの実践的課題に対して討論が行われました。さらに、「男女のせめぎあいの genomic imprinting」と題して、ゲノムからみた雌雄の葛藤、「男と女の性」では生殖と性との関係をタブーにまで踏み込んだ討論がありました。培精士対象のシンポジウム「現代ARTの展望」(CG)の原点に返って、「未来ARTの展望・生殖細胞の創生技術の最近の進歩」では実際の生殖技術に関する最新情報を共有できました。本年学会の一般口演演題は一五五題と例年の倍であり、ポスター演題も二〇九題あり、各セッションとも活発な意見交換が行われました。最後に、企画の段階から北陸地区生殖医学関係者に多大な支援をいただき、また金沢大学の多くの皆様からご意見をいただきましたことに感謝申し上げます。(並木 幹夫 記)

## 第二回金沢大学未来 開拓研究公開シンポ ジウム東京にて開催

Features for the Futureをキャッチコピーとする、金沢大学未来開拓研究公開シンポジウムが、平成二十二年二月六日、東京都千代田区学術総合センター一橋記念講堂を会場に開催された。本シンポジウムは、学域・研究域創設を記念し、各研究域のアクティビティを社会に示すため、金沢大学が平成二十年度来主催してきたもので、県外での開催は今回が最初である。今回のテーマは環境。「人と環境の交わりを考える」能登半島、

東アジア、そして世界」との主タイトルの下に、安井至製品評価技術基盤機構理事長の特別講演「二五%の光と影」社会研究域からは井上英夫教授の講演「任み続けられる地域を創る」能登からの発信、「理工研究域からは岩坂泰信特任教授の講演「能登に吹く風から見える世界」環境を超えて環境を考える」、医薬保健研究域からは本学五十四年卒業の城戸照彦教授の講演「北陸からベトナムへ」環境保健の国境を越えた展開」が行われた。シンポジウムは、会場がほぼ一杯となる四五〇名超の参加者を得、盛会裡に開催された。参加者は、環境省・文部科学省等省庁、企業、自治体、NPO等各種団体、メディア等多岐に亘り、参加環境問題への問題意識の高まり、広がり、と金沢大学が展開してきた環境への取組みへの関心を感じられたことであつた。シンポジウムにつき開催された「金沢大学交流会」にも多数の参加があり、活発な懇談と交流が繰りひろげられた。十全同窓会東京支部、



シンポジウム冒頭であいさつする中村信一学長

千葉支部・山梨支部からもご参加いただいた。ご参加いただきました会員の先生方ならびにお声をかけていただきました各位に改めて御礼申し上げます。(山本 博 記)

# 十全学術行脚 第十八回 保健学系(三)

保健学系の三回目は、量子医療技術学講座、理学療法科学講座および作業療法科学講座の同窓会員や医学部旧教員を紹介する。量子医療技術学講座は放射線技術科学専攻を担当し、技術革新の著しい分野である。理学療法科学講座と作業療法科学講座はリハビリテーション医学の両輪として医療のみならず介護にも活動領域を広げている。



鈴木 正行 教授

鈴木正行教授（昭和五十年卒業）は故高島力放射線科教授の就任と同時に放射線科に入局し、その後、二年間にわたり秋田大学で高橋睦正教授から神経放射線診断の指導を受け、平成九年四月に金沢大学医学部附属病院放射線部助教から保健学放射線技術科学専攻教授となった。専門は神経放射線診断学であるが、最近ではX線CTやMRIを用いた画像解剖学、中でも中枢神経系や胸部領域の画像解剖と破格についての研究を行っている。

北陸地方におけるX線CTやMRIの初期から、その診断に関与し、平成十五年には「第一線の診療放射線技師のための撮影オーダーの読みかた」とCT・MRI検査の実際」を著し、放射線技師が実際のCT・MRI検査において必要とされる臨床知識や撮像技術を解説した。学

生のことを考えた教育に重点をおき、卒業研究を始めとする学部教育、MRIを中心とした大学院教育を行っている。

※鈴木正行教授は本年四月三日に急逝されました。謹んでお知らせ申し上げますと共にご冥福をお祈り申し上げます（合掌）。



水上 勇治 教授

水上勇治教授（会員II、京都府立医大 昭和四十八年卒業）は、附属病院検査部、病理部の出身で松原藤継教授の下で甲状腺病理学の研究をしていた。平成九年に保健学部に赴任した後は乳腺病理の研究に取り組んでいる。近年、乳癌は著しく増加しており、乳癌の早期発見のためマンモグラフィや超音波を用いた検査が積極的に行われている。放射線技術科学専攻の学生にとり、乳癌の病理や組織分類、進展様式等を理解しておくことは、将来マンモグラフィ撮影や読影を行う上で非常に有益である。このため、学部四年生の卒業研究では、乳癌の画像所見と病理所見の対比に重点をおいて学生とともに研究を進めている。今後はさらに、乳癌の化学療法の効果に対する予測因子の解明や、乳癌の発生、進展における乳癌幹細胞の役割についても研究を進めたいと考えている。



真田 茂 教授

真田茂教授（会員II）は、医療短大時代からの生え抜きである。X線動画像とコンピュータ画像解析を用い、胸部を対象として呼吸機能と循環機能を、四肢関節系を対象として運動機能を簡便に評価できるスクリーニング画像検査法の開発を行っている。これらの研究は、放射線科学、呼吸器内科学、整形外科、歯科口腔外科学などの緒先生方の絶大なご支援をいただきながら進めてきたとのことであり、ようやく臨床試用システムが構築されるところである。また、医薬保健研究领域附属の健康増進科学センターでは、地域社会と連携しながら人々の健康維持・増進を図る社会基盤創りにも着手している。医療機関での検査・治療情報や個人的な保健行動とその成果なども含め、人々が自らの健康情報の全てを把握できるIT健康通帳を作ろうと考えている。



川島 博子 准教授

川島博子准教授（平成二年卒業）は放射線医学教室出身で、故高島力名誉教授、松井修教授のもと、一貫して乳腺領域の画像診断・研究に取り組んできた。放射線医学教室講師を経て昨年四月付けで量子医療技術学准教授に就任した。乳腺領域の画像診断を専門とする放射線科医としては全国でも草分け的な存在であり、現在も金沢大学附属病院乳腺科にて臨床・研究を行っている。乳癌患者の増加と画像診断を用いた乳癌検診の普及により、マンモグラフィ、乳腺超音波検査、そして乳

腺の磁気共鳴画像（MRI）の施行件数は増加の一途をたどっている。マンモグラフィの撮影や超音波検査の施行は女性技師でなければできない時代となっており、女性放射線技師に対するニーズは増す一方である。保健学科では一人でも多くの優秀な女性放射線技師を世に送り出すべく、指導していきたいと考えている。



細 正博 教授

細正博教授（昭和五十九年卒業）は形態機能病理学（旧第二病理学教室）出身で、専門基礎科目の解剖学および病理学関連の講義・実習を担当している。研究は、所属する理学療法という分野に新たに病理学的方法論を持ち込み、主に動物実験モデルを用いた運動器についてのエビデンス、とりわけ関節拘縮の病態と治療手技の妥当性について検討している。これまで不明であった拘縮時の関節構成体（関節軟骨、滑膜、関節包等）および軟部組織（脂肪織、神経、皮膚等）の組織変化の自然史を明らかにし、これに対する理学療法的治療手技（ストレッチ、牽引、温熱、寒冷等）の効果を、具体的に検証している。理学療法という分野はまだ若く、現在ようやく理学療法士の第一世代が引退する年齢にさしかかっているところであり、その第一世代が手探りで開拓してきた貴重な知見を、医学的（科学的）な記述へと整えるべく、日々教えを請うているところである。



浅井 仁 教授

浅井仁教授（会員II）は、旧医療技術短期大学部助手時代から附属病院で理学

療法士として研鑽を積みながら、運動身体管理学教室の藤原勝夫教授のご指導のもと、一貫してヒトの立位位置の知覚と体性感覚情報との関係についての研究に取り組んできた。この研究では、新たに考案した足底冷却装置を用いて足底の任意の部分の冷却することによって感覚能を低下させ、立位位置知覚における任意部位からの圧情報の機能的役割を明らかにした。現在も藤原教授と共同で研究を進めており、立位位置の知覚能と立位姿勢の安定性との関係が明らかになりつつあり、位置知覚のために参照される体性感覚情報についても数多くの知見を得ている。今後は、研究で得られた知見を学部での授業（中枢神経障害理学療法学）に還元し、より質の高い理学療法士を育て、さらに大学院での研究指導を通して患者さんや高齢者の方々が立位位置を正確に知覚するための方法を開発したいと考えている。



染矢富士子 教授

染矢富士子教授（昭和五十六年卒業）は、卒業時にリハビリテーション医学の道に進むべく、現名誉教授の立野勝彦先生からの助言に従い旧整形外科学教室に入局、大学院に進学し故野村進名誉教授の指導の下、末梢神経と筋の相互作用に基づく筋萎縮のメカニズムについての研究を行った。昭和六十三年に医療技術短期大学部に助教として赴任し、現保健学系教授に至っている。研究分野は動的筋疲労のメカニズムの解明にシフトし、更に体力にかかわる呼吸機能の病態とリハビリテーション介入に取り組んでいる。附属

病院のリハビリテーション部では各診療科からの紹介患者の診療を行い、特に全身性強皮症に伴う間質性肺炎の運動療法についてはようやくエビデンスが明らかになりつつあり、多様な病態に対応できるような研究を進めている。また、リハビリテーション専門医を目指す医師を指導医として育成しており、日本リハビリテーション医学会北陸地方会の代表幹事として年二回の地方会および教育研修会を主催している。



能登谷晶子 教授

能登谷晶子教授（会員II）は、平成十二年に医学部耳鼻咽喉科学教室から保健学科学作業から脳外科、神経科精神科、神経内科から紹介される脳卒中の患者さんが多くなり、そのリハビリテーションとくに言語を中心とした高次脳機能障害の領域に対象が広がった。この経験を活かすべく保健学科学作業療法科学講座に異動した。長い臨床経験を活かした講義を行うという考えから、常に講義内容に工夫を凝らしており、その準備に多くの時間を割いている。現在も耳鼻咽喉科言語外来で言語聴覚障害者や神経内科から紹介される高次脳機能障害者を担当しており、臨床の重要性を学生にも伝えていきたいと願っている。

なお、保健学科学創設に尽力された立野勝彦名誉教授（昭和四十四年卒業）は平成二十一年春退職された。

（大竹 茂樹 記）

## 八十年前の金沢大学医学部が蘇る

DVD・VHS 「金澤医科大学時代の教育・研究・診療風景」好評頒布中

大正末期の金澤医科大学（金沢大学医学類の前身）の授業・実験・課外活動および附属病院での診療風景を収録。当時の医療の様子を伝える貴重な映像です。

### ■内容

- 医科大学全景
  - 医化学教室
  - 細菌学教室
  - 法医学教室
  - 附属病院全景
  - 内科学教室
  - 小児科学教室
  - 皮膚科学教室
  - 精神病学教室
  - 外科学教室
  - 眼科学教室
  - 耳鼻咽喉科学教室
  - 秩父宮殿下御台臨
  - 十全会水泳部
- 現在の金沢大学医学系研究科・医学部



### ■価格

DVD、VHS（全約七十五分）  
各一〇、〇〇〇円（送料込み）

### ■お申込方法

左記事務局にお名前、ご住所をご連絡下さい。申込用紙（ゆうちょ銀行の払込票）をお送り致します。払込票に必要事項を記入のうえ、代金をお振込下さい。お振込頂いてから二週間程度でお届けいたします。

E-mail : jizen@med.kanazawa-u.ac.jp  
FAX : 〇七六（二三四）四二〇八  
電話 : 〇七六（二六五）二二三三  
担当 : 山岸 浩子

### 免除会員の先生方へのお礼

平成二十一年度 会員名簿改訂事業には、お陰様で約七十三%の先生方からのご協力を賜りました（平成二十二年四月末日現在）。多大なるご協力に厚く御礼申し上げます。

### 会費納入のお願い

同封の払込用紙をご利用下さい。

## 病院紹介

### 浅ノ川総合病院

#### 沿革

浅ノ川総合病院は、金沢市の中心部からやや北東の小坂町にあり、江戸時代の頃より北国街道として栄えていたかつての国道八号線沿いに位置しています。付近にはJR東金沢駅や三月に完成になったばかりの山側環状の神谷内I.C.により、県外からのアクセスも非常に優れた立地です。

浅ノ川総合病院は、東の茶屋街に近い馬場町で昭和二十六年に開設され、浅野川に近いことから、その名が付けられました。その後、四十四年に春日町へ移転、六十三年に現在の小坂町へ移築されました。開設者の小市政男理事長は金沢医科大学病院の開設に携わった関係で、春日町時代には金沢医科大学病院の暫定付属病院だったこともあり、その後、系列病院を同一法人として統合、浅ノ川総合病院を中核とした浅ノ川病院グループが生まれました。

当浅ノ川病院グループは、それぞれ機能の異なる五つの病院（浅ノ川総合病院、桜ヶ丘病院、千木病院、金沢脳神経外科病院、心臓血管センター金沢循環器病院）と老人保健施設（田中町温泉ケアセンター）で構成され、二千床を超える病床を地域に提供しています。当院は更に福久ケアセンター、千木町ケアセンター、千木福祉会（社会福祉法人）、はなみずき（有料老人ホーム）を含む浅ノ川グループ

の基幹病院として、また地域の医療ニーズに対応するため、急性期を担う高機能総合病院として注力してまいりました。

#### 地域密着の高機能病院として

私たちは、「皆様の信頼を得る、思いやりのある医療を提供します。」の病院理念に掲げますとおり、地域住人が安心できる医療環境を提供することが使命であると考えます。このため地域密着型の高機能総合病院として、地域の要望に答えるために、十八の診療科と各種治療センターを設置しています。

北陸随一となる九十台の透視装置を配した透視センターでは、約二百名の入院・外来患者様の人工透視を行っています。

定位放射線外科センターには最先端の医療機器を導入しています。日本海側で最初に導入されたガンナイフは開頭せずに脳腫瘍を治療する放射線機器で、これまでに三五〇〇例の治療実績を誇ります。また、日本初導入となったノバリスは全身の腫瘍に対し有効で、低侵襲で副作用も少ない極めて有効な治療機器で、全国各地から患者様がお見えになり、スタッフはフル回転で患者様の治療にあたっています。

この他、三テスラ、一・五テスラの高性能のMRIや、全身のがん検索に有用なPET/CT装置を備え、腫瘍や脳血管障害の診断に力を発揮しています。

また、ユニークなものとして、人工呼吸センターと呼ばれる病棟が稼働しています。この病棟はレスピレーターを装着した患者様が入院され、二十四時間熟練した医師、看護師、コメディカルスタッフに支えられ、安全な治療を提供してい

ます。このような人工呼吸センターを持つ病院は当院と札幌に一施設があるのみです。

#### 新たな地域社会の求めに応じて

これらの地域のニーズを反映した取り組みに加え、さらなる地域社会へ貢献できる病院として「病気を防ぐ」、「病気と上手に付き合う」ことへの取り組みを始めています。このため、健診センターでの健診事業だけでなく、生活習慣病予防へのチーム活動を推進し、糖尿病教室や健康講座の健康増進活動にも努力しています。また、地域を支える人材を確保するために、医師や看護師の育成にも取り組んでいます。平成十六年にスタートした新研修医制度では、金沢大学病院のたすきがけの協力病院として参加。

都会で研修し、近年は北陸にとどまる研修医が少なくなつたため、自らも管理型研修病院として研修医の養成を行っています。また、金沢大学のクリニカルクラークシップやベッドサイドラーニング、金沢医科大学の学外実習を受け入れ、医学生を教育する場として、両大学の実習協力病院となつていきます。そのほか看護師の養成は系列の金沢看護専門学校により実施されており、同校は県内唯一の通信制も開校し、地域に働く看護師のスキルアップを支援しています。

患者本位の医療サービスを求め、前述の定位放射線治療機器を活用した低侵襲治療を推進することにより、短期入院・外来通院で

の放射線治療が可能となりました。さらに、外来化学療法センターを新設し、がん治療における患者様のQOL向上に配慮しています。また、回復期リハビリテーション病棟の設置と、訪問リハビリテーションを通じて、患者様に急性期から維持期までの充実したリハビリテーション治療を提供しています。

これからも当院の特徴を生かし、絶えず地域を見つめ、必要な医療サービスの提供に努めてまいります。新しい道路の完成により、自動車社会の波が押し寄せ、かつての北国街道の面影も失われつつありますが、私たち浅ノ川総合病院は、「人を育て、地域を支える」新たな道しるべとなるよう共に歩みたいと願っています。

（院長 上野 敏男 記）



# 病院紹介

## 黒部市民病院

### ●病院の沿革

昭和二十三年桜井町国民健康保険組合直営組合立下新川厚生病院として、病床七十二床で創立。昭和五十一年に黒部市民病院と改称。昭和五十七年・六十三年・平成十年の三次にわたる病院整備事業を経て、現在、一般病床四〇五、結核病床五、感染病床四の計四一四床と介護老人保健施設五十床を併設する病院となっております。

### ●病院の機能

この間、地域救命センター（一次救急を含め年間のべ約二万人）、腎センター（年間透析のべ約二万人）、健康管理センター（ドック年間受診者約六千人）、在宅介護支援センター、デイサービスセンターのほか、へき地巡回診療（年間のべ約一三〇回）などの指定や設置により地域医療の重要機能を担っています。

そのほか開放型病床、地域災害医療センター、新川地域周産期母子医療センター、院内保育所、臨床研修病院、臨床研修センター、新川医療圏小児急患センター、地域がん診療連携拠点病院などの指定・開設にいたしました。

また、医療安全管理室を設置、医療安全と感染対策それぞれに専従スタッフをおき質の向上に努めています。

最近では平成十八年扇状地ネット（当院の医療情報をかかりつけ医の診療所で

閲覧するシステム）を運用開始。DPC-Ⅱ導入。助産師外来設置。平成十九年敷地内禁煙の施行。平成二十年通院治療室（通院抗がん化学療法）、乳がん患者の会発足、DMAT発足。平成二十一年新川医療圏周産期連携システム開始、婦人科がん患者の会発足、平成二十二年臨床スポーツ医学センター開設などがあげられます。病院機能評価は平成二十一年度に二回目の認定を受けました。

### ●病院の特徴

黒部市民病院は現在、県東部の二市二町（あさひ町・入善町・黒部市・魚津市、総人口約十三万人）からなる新川医療圏の地域医療の基幹病院として、地域の医療機関との連携を基盤に、主として急性期医療を担っています。

前院長高橋英輔先生の示された「患医一如」すなわち患者とともになやみ、よろこびあう医療をめざす姿勢は当院医療の基本的な姿勢であります。これに加えて、現在、病院はそこに働くスタッフをあらゆる面で応援することに全力を傾けています。よりよい環境で働けるからこそスタッフは患者や家族によりよい医療を提供できるものとの信念にたちあしずつではあります。改革を続けてきております。病院機能の電子化に早くから取り組み平成十四年には電子カルテ化にいたり、職種間の連携が進みました。

臨床研修施設として平成十五年米国マールサ大学医学部および中央ジョージア医療センターと医療交流協定締結、指導医を米国から招聘し研修医の指導とスタッフとの医学的な交流を図るとともに、臨床研修医を米国に派遣、現地での

臨床研修を開始、平成十九年からはコメディカルの米国研修も実施しています。彼我の医療の状況や考え方の違いを肌で感じるこの意義はきわめて高いものがあり、研修体験者個人の視野の拡張・意欲の高揚と病院の医療体制の改善にも資するところがあると思っております。

平成十七年以来、研修医からは、この米国研修と救急医療の症例の豊富さ、指導体制の充実により好評を得ています。

医師は今年度、常勤医六十六名、研修医は十七名となっております。医師に優しい病院として平成十八年に「医師の子育て支援に関する内規」を制定し、男女ともに子育てをしながら就業できる環境をつくりました。メディカルアシスタントの採用により医師の事務的業務の軽減を得ることができました。また、時間外労働に対する報酬のアップを実現しました。

### ●病院のこれからの課題

医師の就労条件のさらなる改善とコメディカル職員の自己研鑽の奨励により人的資産の充実を図ろうとしています。

病院事業としては救急医療・急性期医療を重点とした病院の大幅な改革を、平成二十八年竣工を目標に基本設計に取り



掛かっています。

すべての職員にとって夢を持てる働き甲斐のある職場をつくることにより、結果として地域住民により優れた温かい医療を提供し、さらにその結果として地域住民が病院を応援してくれる、そのような「患医一如」を実現していきたいと考えています。

（院長 新居 隆 記）

## 教室だより

## 寄生虫感染症制御学

講座の沿革 寄生虫学講座は一九五〇

年に設置されましたが、一九九五年に二巨スタツフがゼロとなりました。しかし、二〇〇〇年十月、大阪市大からの井関基弘教授の赴任により再開、二〇〇一年四月、寄生虫感染症制御学講座と改称し現在に至っています。現体制は、井関基弘教授を引き継いで二〇〇五年四月より教室主任となった所正治講師、井関基弘客員教授、中田恵子事務補佐員、その他、博士課程大学院生として仲本賢太郎（金沢大保健学科出身）、アムジャツド・フセイン（パレスチナ）、荒井朋子（金沢大保健学科出身）、ムシウル・ラーマン（バングラデシュ）、社会人修士大学院生、松村隆弘（金沢日赤病院検査室）といった多彩なメンバーによって支えられています。

**寄生虫学** 寄生虫学というと、単なる寄生虫の生物学と誤解されることが多いようですが、歴史的には植民地医学・熱帯医学から始まり、現代でも国際医療協力、公衆衛生の視点とともに、生体防御、感染病理、臨床感染症を含む幅広い領域が網羅されています。このような寄生虫学の特徴を生かし、以下のような教育・研究が本講座で実施されています。**教育** 博士・修士課程では、基礎系教育セミナー・寄生虫感染症制御学特論を担当しており、研究経過報告・ディスカッションおよび寄生虫感染症領域の最新論文の抄読会が毎週教

室セミナーとして実施されています。また、所属大学院生は、熱帯病流行地域におけるフィールドワークを実施することで、感染症制御に関する実地体験を積んでいます。学部教育では、医学科の二年後期の講義と三年後期の実習を寄生虫学として実施しているほか、三年後期の基本的基礎配属、また四年前期の感染症特講を分担しています。その他、保健学科の検査技術科学専攻では、三年前期の公衆衛生学演習および病態生理学、また三年後期から四年前期の卒業研究指導を担当しています。

**研究** 本講座では、寄生虫の中でも病原性腸管寄生虫原虫を材料とし、感染症対策の構築を目的として、創薬、分子分類、国際医療協力の三つのキーワードにフォーカスし、研究を進めています。腸管寄生虫原虫は、国内においても、施設内での集団感染や旅行者下痢症さらに日和見感染症として注目されていますが、臨床におけるその認知度は低く、感染症法の五類全数把握届出疾患であるジアルジア、クリプトスポリジウム、赤痢アメーバですら、しばしば未診断のまま治療に難渋している例があります。

**一、新規抗原虫薬開発** 新規抗原虫薬開発のためのシーズ探索と共に、抗ガン剤などの感染症以外で使用されている従来薬を用いた抗原虫作用のスクリーニングを実施してきました。これまでにリアルタイムPCRによる薬剤スクリーニング手法を確立したほか、その成果として、平成十九年度の金沢大学開発研究促進助成「クリプトスポリジウム症の治療又は予防薬」の支援を得て特許を取得し、製薬会社との共同開発への道を探っています。

す。しかし、無視された疾患 (Neglected Diseases) とも呼ばれる寄生虫疾患に対する創薬の実現は困難を極め、現在は、既存薬の適応の拡大による新規治療法の提供へと方向修正を試みています。

既に先進国では見られなくなった途上国のみで問題となっている疾患であっても、研究開発が可能なのは先進国の製薬会社のみであり、このような新薬開発の試みは、先進国の責務として継続していくべき課題です。

**二、分子分類による原虫分類の再評価** 分子生物学の発展と遺伝子レベルでの種内および種間多型の解析成果は、長年にわたり形態学的なアプローチによって検出・記載されてきた生物分類に革命的な変化をもたらし、さらに進化学的な解析までもが可能となりました。

**■ジアルジアにおける種内多型形成メカニズムの解析** 平成二十一・二十三年度科学研費補助金「基盤(B)」により、国内外の様々な地域 (インドネシア、ネパール等)・宿主由来 (ヒト、イヌ、ネコ、サル、野鼠等)、異なる病原性を保持する株 (下痢症患者、無症候性感染者) のサンプリングを実施し、遺伝子型を詳細解析しています。これまでの解析結果からは、本原虫が非常に高いレベルの種内多型を保持し、その保持には生息地域内でのライフサイクルの隔離が重要な役割を果たしているらしいこと、さらに、流行地域での繰り返しの感染や、重複感染とも何らかの相関を持ちうる事が明らかになってきました。このようなデータは、本原虫に対する公衆衛生対策構築に有用です。**■クリプトスポリジウムの遺伝子型分類と高感度検出** 日和見感染症として重要

な下痢起因原虫クリプトスポリジウムをターゲットとして、クリプトスポリジウム属の種を網羅的に検出可能な新規PCR法を開発しました (平成二十年度厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業)。本法を用いた HIV / AIDS 感染における免疫再構築症候群の予防のためのスクリーニングおよび先天性高IBM症候群における骨髄移植前スクリーニングを実施しています。

**三、インドネシアにおける腸管寄生虫対策の構築** 途上国においては、原虫は下痢症の原因として重要ですが、検査はほとんど行われず、抗生剤による盲目的治療が実施されています。しかし、多くの原虫治療薬がジェネリック薬を含めて安く普及している現状を考慮すると、これは実に残念な事態であるといえます。この観点から、途上国における下痢症に占める原虫起因下痢症の実態調査を二〇〇四年度よりインドネシアで開始し、現地保健機関による対策構築への協力を進めています。

**最後に** 国内の多くの大学から寄生虫学講座が姿を消しています。しかし、グローバル化の進展とともに多くの感染症が国境を超えて短時間でアウトブレイクを引き起こしている現状を考えると、寄生虫学研究を保持することの重要性は言うまでもありません。また、国内でも年間約八〇〇例が報告される赤痢アメーバ症や、急増しているアカントアメーバ角膜炎など要注意の寄生虫疾患が未だ存在しています。同窓会会員の皆様におかれましては、寄生虫感染が疑われる場合には、母校の寄生虫学教室までお気軽にご相談いただければと思います。(所 正治 記)

## 教室だより

### 臓器機能制御学

山岸正和教授が着任し、大過なく五年目を迎えました。金沢大学医薬保健研究域医学系、大学院循環医学専攻・臓器機能制御学教室と改称されてはいますが、実地臨床を基本とする旧第二内科の伝統を受け継ぐ内科学教室として益々発展いたしております。循環器内科学を柱として、密接な関わりのある高血圧、糖尿病分野（内分泌代謝学）、血管炎を起点とするリウマチ・膠原病分野、そして栄養代謝学研究を推進しております消化器病分野、の複合領域における診療、研究、教育を行っています。

循環器内科学分野では動脈硬化、不整脈、心不全のバランスのとれた制圧を目指しています。とりわけこの分野を横断的に主導するため起動しました先進医学センターでは坪川俊成助教指導の下、再生医療や先端的デバイスの開発にかかわる臨床研究を進めています。中でも、動物実験施設内に国内でも有数の大型動物心臓カテーテル検査室を設置（心臓血管外科と共用）し、前臨床試験を含めてのトランスレーショナルリサーチを推進しております。特許取得も積極的に進め、平成二十一年度までに三件の特願・特開を得ました。川尻剛助教（現病棟医長）が指導する動脈硬化研究室では、圧倒的な症例数を誇る家族性高コレステロール血症に加えて、特にコレステロール転送蛋白（CEETP）欠損

症、常染色体劣性高コレステロール血症の発見が世界的な注目を集めています。さらに山岸教授の専門でもある冠動脈内超音波検査を用いて、関連病院との多施設共同試験を進めています。井野秀一講師（循環器内科副科長）が指導する分子心臓病研究室では、藤野陽准教授（保健学科）、今野哲雄助教による心筋症の遺伝子解析に基づいて、その機能解析に着手しつつあります。また林研至助教が行うQT延長症候群などのチャネル病の機能解析は世界レベルです。

内分泌代謝内科学分野では武田仁勇准教授（代謝・内分泌科長）の指導の下、米田隆医師、出村昌史助教らが、特に「原発性アルドステロン症」では日本の中心的役割を果たしています。また病因に関して遺伝子レベルやタンパクレベルでの解析を行い、新たな発見を積み重ねています。さらに工学的手法による「ナノテクノロジー」を用いた「コルチゾール迅速測定チップ」を北陸先端大学院と共同で開発し臨床応用しています。八木邦公講師（外来医長）の指導による、血管代謝・再生研究室では、丁寧な糖尿病臨床を通して、基礎および臨床、さらにコメディカルとの協調もできる高度な内科医の育成を目指しています。特に血管合併症を中心とした高度な慢性合併症を呈する糖尿病症例の診療を通して、糖尿病血管合併症に対する臨床メーカーと治療の開発を目的とする臨床研究を行っています。

リウマチ・膠原病学分野では川野充弘講師（リウマチ・膠原病内科科長）は、主としてIgG4関連疾患とシェーグレン症候群の研究・診療を行っています。

「IgG4研究会」を立ち上げ、診断・治療法の確立と、再発に対するモニタリング法の開発、病因に関する候補因子としての結核菌について全国規模での共同研究を行っています。またシェーグレン学会の「抗セントロメア抗体陽性シェーグレン症候群」小委員会の委員長として、本疾患の啓蒙と全国規模での症例集積を行っています。

消化器免疫研究分野では岡田俊英講師、吉田功助教らが中心となり、消化器診療一般に加えて、特にクローン病・潰瘍性大腸炎に関する臨床・研究では国内外で秀でていきます。最近では関連病院を含めた臨床研究、腸内細菌に関する基礎的研究、腸管再生に関する基礎的研究に力を入れています。

留学にも力を注ぎ、国内では国立循環器病研究センター、国立がん研究センター、豊橋ハートセンター、国外ではハーバード大学、スタンフォード大学、ペイラー医科大学、ジュネーブ大学、デュルク大学にスタツフ、留学生を置き、交流を密にしております。お陰様で、平成二十二年度での文部科学省科学研究費の取得件数が三割増となりましたことからこの効果が現れているものと推察しております。特筆すべき話題として、地域医療への貢献が挙げられます。奥能登、南加賀地域の医療の多くを私どもの医局が担ってまいりました。これからも地域医療への参加も積極的に推進してまいります。

講座の名称、教授の専門性は時代とともに変遷しましたが、「人を育て、我々も育つ」を究極の命題とする教室の方針は変わらず、スタツフ、専門研修医、初

期研修医、そして、学生が一体となつての臨床医学を実践し続けています。諸先輩方の御支援を、本紙上をもちまして改めてお願いする次第です。

（井野 秀一 記）



支部だより

福島支部

平成の初めの頃は、故西田尚紀先生(金沢大学医学部名誉教授)に毎年、福島へ来ていただき、その後は、故西田先生のご推挙により前同窓会長の竹田亮祐先生(金沢大学医学部名誉教授)に毎年、福島に来ていただき、吾々支部会員に色々な面から啓蒙していただきました。

又、東北大学医学部名誉教授 橋武彦先生、福島県医科大学名誉教授 福島匡昭先生(現、福島学院大学教授非常勤)、更に東北大学医学部名誉教授 岡本宏先生も良

く当支部会に出席くださいました。大学の様子は、十全同窓会報と金沢大学の広報アカンサスを通じて大体の事を推察して居ります。

当福島支部会は、小生が入会した頃(昭和四十年)は、「I」会員と「II」会員



合わせて約四十名足らずでした。四十年の間に退会された方、お亡くなりになられた方にて、現在は「I」会員十四名、「II」会員が五名で、現在約二十名足らずの会員です。

同窓会員の制度も変り、当福島支部第「I」会員は全部、金沢大学医学部の卒業生となり、第「II」会員は、他の大学の医学部卒業か、専門部を卒業された方になりました。

支部同窓会の会場は、いつもの「料亭京香」にて、おなじみの米沢牛のシャブシャブに舌鼓を打ちながら、懐かしい金沢の思い出話に花が咲き、時が経つのも忘れ再会を念じながら帰路に着きました。

小生、平成十二年より十全同窓会福島支部長を引受け十年になりました。体調の都合で四年限、支部同窓会を見送りにして開催出来ず申し訳ありませんでした。

平成二十二年より、医学部一年後輩の鈴木孝雄先生に次期当支部会長をお願い申しましたところ、快く皆さんの同意を得ました。本人も快く引受けて下さいましたので、何卒よろしくご諒承下さい。

尚、監事に、齋藤光正先生、会計に竹田洋介先生をお願いし快く引受けて下さいました。皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

第二十六回福島支部総会出席者

- 後列左から…齋藤光正(昭和四十一年卒業)、福島匡昭(昭和三十四年卒業)、竹田洋介(昭和六十年卒業)
- 前列左から…鈴木孝雄(昭和三十三年卒業)、小野木保(昭和三十一年卒業)

以上  
(小野木 保 記)

大分支部

平成二十一年度十全同窓会大分支部会は、平成二十一年十一月二十八日十九時より大分市都町三丁目ふく亭本店で、古林秀則大分大学副学長・医学部附属病院長再任の祝賀を兼ねて開かれました。

このほど熊本大学医学部解剖学教授の定年を迎えられ、熊本大学名誉教授とされた、児玉公道 学校法人立志学園・九州中央リハビリテーション学院長に熊本市からご参加いただき、今回も県内の全会員が集まり盛会でした。

古林病院長からは、医科大学の大分大学への統合と大学法人化という変革期の多彩な話題が尽きず、また西郡先生からは、現今医師不足の医療事情で地元の県北地方と福岡県豊前地方の中核施設である中津市民病院の産科が閉鎖の危機に陥って



いること(後に関係者の努力で解決のめどが立っております)、児玉先生からは学院運営の苦心談等々、話題は尽きず夜更けるのも忘れる次第でした。今後とも会員諸先生のご健闘を期待して報告いたします。

後列右から、西郡修道(昭和五十年卒業)、鹿野奉昭(昭和四十六年卒業)、土屋寿司郎(昭和四十三年卒業)。

前列右から、古林秀則(昭和四十九年卒業)、児玉公道(昭和五十一年卒業)、竹下正純(昭和三十三年卒業)。

(竹下 正純 記)

三重支部

平成二十一年度十全同窓会三重支部会総会は、平成二十二年二月二十八日(日)に津市内で行われました。本年度総会には十一人の会員が出席しました。

総会では三重支部長の水本龍二先生からご挨拶があった後、水本支部長の叙勲のお祝いと、原田資先生の紀南医師会会長就任のお祝いを行いました。今年度から平成二十一年卒業の黒川義博先生が新しく会員に加わりました。平成二十年時点で、三重支部会員は二十八名です。

その後、懇親会に移りました。懇親会も和やかな雰囲気うちに終わり、閉会となりました。

(山門 亨一郎 記)

写真

- 後列左から…森一満(昭和五十一年卒業)、黒川義博(平成二十一年卒業)、春木祐司(平成十七年卒業)、中瀬玲子(昭和六十二年卒業)、大石晃嗣(昭和六十三年卒業)、山門亨一郎(昭和

六十二年卒業)  
前列左から…祖父江直久(昭和五十一年卒業)、野口孝(特別会員)、水本龍二(昭和三十年卒業)(支部長)、原田資(昭和四十六年卒業)、伊藤敏秋(昭和五十二年卒業)



### 沖繩支部

時は春、金沢は桜の季節ですが、沖繩ではすでに初夏の兆しで、海開きも終了しました。又、人事往來の節目の時期でもあります。恒例の十全同窓会沖繩支部総会及び懇親会は三月七日、ホテル日航那覇にて開催されました。会員数は四十二名ですが、出席者は二十名程です。毎年本部の理事の先生にお出で頂き、

記念講演を拜聴することとなり深謝致します。今年には法医学教授大島徹理事に「法医学の現在と医事紛争の現状」と銘打って医療界と司法界の接点を現実に即してお話して頂きました。質疑応答では異状死に関しては臨床関係学会の認定と法規上の解釈に若干の齟齬のあることが指摘されました。

支部総会は会員にとって年に一度の邂逅の機会であり、青春の記憶を取り戻すとともに、最近では老いを感じる年齢に達し、例にもれず、年々高齢化しております。それでも現役で開業医、勤務医、公務員として県内の医療界においては中堅として中枢部でも活躍しております。

世代交代で若い先生方にも呼びかけるのですが、Generation Gapがあり、出席者も固定化し、何時も金沢時代の事が、話題の端緒となります。それから次のような議論へ発展しました。

地元では例の一県一医学校施策で最後に新設された琉球大学医学部への進学が大部分となり金大への進学は極めて稀となりました。そのため同窓会のGeneration Gapは深く現在でも続いております。ところがこの二、三年は沖繩での卒業研修システムが注目され、むしろ今では全国他府県の医大卒の研修医が大勢参集することとなりました。いわば研修医のメッカです。二年の研修後も地元に着するか否かが愁眉の的となっております。

新臨床研修制度のスタートより「沖繩プログラム」が現在も進行中です。即ち、従来のアングロサクソン方式のインターン、レジデント制を基に県内の中核医療施設が組織横断的に協力して、救急部、精神科等を含め、医療の第一線で実践的

医療技術と理論をマスターするところに特徴がある「沖繩プログラム」となっております。又、そのプログラムでは医療の実践の場は離島の診療所や市井の開業医も含まれ細部に張りめぐらされております。二年間で多岐にわたる臨床経験を経て一般臨床医が育成するシステムです。今後の課題としては専門医の育成と基礎的研究テーマの設定を重層する必要があると。ところが最後には、文科省か厚労省か、大病院か県立病院か民間病院か、又あの頃の議論に戻ってしまいました。かくして議論が循環し、歴史は繰り返されると学生時代に戻ったところでお開きとなります。

むろん金沢からの研修医に関しては同窓会も全面的にBack Upする事が確認されました。

(大浦 孝 記)

### 当日の出席者(卒業年)

前列左から…久田友一朗(昭和四十三年卒業)、山城則亮(昭和三十一年卒業)、富山幸佑(昭和四十二年卒業)、大浦孝(昭和四十六年卒業)、大島徹教授、金城国昭(昭和三十一年卒業)、安谷屋茂男(昭和四十六年卒業)、間列左から…知名保(昭和四十七年卒業)、大城功也(昭和四十四年卒業)、伊是名博之(昭和四十九年卒業)、長田信洋(昭和五十三年卒業)、外間政利(昭和五十三年卒業)、安里公(昭和四十八年卒業)、仲里博彦(昭和五十二年卒業)  
後列左から…大城康彦(昭和四十八年卒業)、豊見山義隆(昭和五十八年卒業)、国吉光雄(昭和四十六年卒業)、

伊波久光(昭和五十三年卒業)、堀川恭偉(昭和五十六年卒業)、浜端宏英(昭和六十年卒業)



# クラス会

## 昭和四十四年入学生

### 五十年卒業生 同窓会

平成二十一年十月十一日(日)に標題の同窓会を金城楼にて開催した。長い名称をつけたが、諸事情により入学年度・



卒業年度が異なっても同級として学んだ諸氏に参加を求めたためである。一三〇名余りのうち北陸三県からは三十二名、遠来勢は二十名の五十二名が出席した。関東地区では有志による同窓会が活発に行われているようだが、全国に呼びかけたのは数年ぶりであり、また、今風に言えばアラカン、アラウンド還暦世代となったこともあり多数の参加を得て盛会であった。

会は物故者への黙祷、乾杯に続き、山本博 血管分子生物学教授から詳細な母校の現況、さらに将来構想についてスライドで講演をしてもらった。次いで千葉英史君が入学時点からの楽しい学生生活、医師としての半生を懐かしい写真の数々とともに披露した。五十二名全員が、近況報告を交えてスピーチを行ったが、三十数年ぶりの再会も多く、名前を聞いて学生時代との風貌の違いと懐かしさから驚きの声も数多く上がった。スピーチのトリは社会人から入学し、当時から同級生の重鎮であった安土勝義君がとめた。昔話にもりあがり、時間は瞬く間に過ぎ、幹事(亀井、京井、中川、前川、喜多)を代表して亀井康二君より、今後の人生の過ごし方、悩む参加者も多い毛髪の移植治療についてプレゼンテーションがあった。

その後、片町に設けた二次会でも、歓談はつきることなく夜遅くまで旧交を温め楽しく過ごした。

(喜多 一郎 記)

## 剛志会 (昭和五十四年卒業) 卒業三十周年記念同窓会

二〇一〇年三月二十一日、昭和五十四年卒業の卒業三十周年を記念する同窓会が湯涌の日の出張館で開かれました。三十周年の年度内に行うことができたが、前から周到に準備されたものではありませんでした。昨年末に誰かが卒業後三十年になるはずだと言い出してから急に決まったものです。まずは、二〇〇九年十二月四日、急遽、同窓会準備会が千取の二階で開かれ、石倉、遠藤、河原、城戸、越野、小森、中嶋の七人が集まりました。幹事グループは金沢大学に残っている七人(大井、太田、河原、城戸、中嶋、藤村、谷内江)、開催日はその日の出席者全員が出席できる三月二十一日に決定しました。その後の連絡はLINEあるいは郵送の二本立てで行いましたが、以前のメーリングリストやできたばかりの同窓会名簿は古い情報が多く、全員に連絡をとるのは大変でした。しかし、この機会にメーリングリストを整備しようと金沢大学の中嶋君を中心に努力した結果、一二〇人中八十三人の正確なメーリングリストが整備されました。個人情報管理が問われる厳しい状況の中、この数が集まったことは今回の同窓会の最大の収穫ではないかという人もいます。

当日午後には改築された講義室と新築された病院の見学会が行なわれました。遠方からの同級生を中心に十七名が集まり、大井、谷内江両君が案内役です。怪しい集団と思われないうようにと、手作りの



のツアー用の小旗を掲げていましたが、より怪しい雰囲気醸し出してしまいました。このグループが湯の出旅館に着いた頃には、他の参加者も徐々に集まってきました。同級生の参加者は四十八名です。北は旭川(相沢)、南は沖繩(宇良)から集まってくることは前日までにその情報を流していましたが、当日ドイツ在住の中川さんがやってきました。連絡が

うまくついでいなかっただけで皆びつくりしていましたが、より国際的な同窓会となりました。

風呂にはいつて旅の疲れをとった後全員が集合し、谷内江教授によるこの三十年間の小立野の変遷に関するミニ講演からはじまりました。皆、なつかしい思い出や新しい風景に感慨深げでした。次いで、杉山武、河崎博、松下央、錦木太門、川尻博男の五君に黙祷を捧げた後に宴会が開かれました。大井教授の開宴の辞と小森医師会長の乾杯に続いて、今回ご臨席賜りました、岡田晃、山口成良、久田欣一、岩喬の四名の恩師からお言葉をお頂戴しました。恩師の招待は横川君が言い出したものですが、昔の偉い教授達のこと、招待の決断まではやや緊張し、若干の時間をかけました。結果的に恩師の名誉教授達にも喜んでいただけたようで、同窓会に招待されたのは初めてだというお話もありました。教え子である我々同窓生全員お話しに聞き入り、この企画は大成功という感想が大多数でした。あとは四十八名と大人数でしたが、全員に近況などを語ってもらいました。一人三分、単純計算しても十時ぐらいになるかとも危惧されましたが、商売柄か、話が簡潔で上手に時間を使って頂いたおかげで、九時二十分に終えることができました。恩師を拍手でお送りした後、二次会となりました。湯の出旅館の収容人員は五十名なので、完全な貸し切りとなり、十二時過ぎまでカラオケを歌いました。大声で語り合いました。カラオケは音を外す人が多い中、藤村君と宇良君の合唱は完璧で、その時だけは全員聞き入っていました。

次の日は湯の出の主人の案内による湯涌の裏山散策に七名が参加、小嶋君の主催による片山津の白山コースでのゴルフは三名が参加しました。結果は聞いていませんが、優勝はやはり小嶋君でしょうとのもつぱらの噂です。同窓会への参加総数五十二名と、人数が多くて幹事達はやや大変でしたが、誰もが喜んで帰っていただいたので、満足しています。尚、庶務全般は河原が行いましたが、会計はより信用のある城戸教授が担当し、メーリングリストを使った会計報告も無事終えました。五年後の同窓会は富山が幹事です。富山の石田夫妻や清水君、沢口君など、お願いします。(河原 栄 記)

### 医師国家試験結果

医学部長・医学類長 井関 一

第一〇四回医師国家試験における本学の合格率は八七・五％で全国八十校中六十位、国立大学四十三校中三十七位でした。新卒者の順位でも同五十七位、三十六位でした。昨年に続き合格率が下位に低迷したことは残念です。この結果を本学の統合卒業試験の順位と比較すると、新卒の不合格者八名のうち五名までが統合試験の最下位六名（1・5のC未満）の中に含まれています。仮にこの五名を

卒業させなければ本学の合格率順位は三十位近く上がるようになります。このことは、教育委員会を中心に教員の大変な努力により毎年作成している統合試験というものが、卒業時の学力を判断するのに実质的な確かな指標となっており、しかもかわらず同試験が卒業判定に生かされていないことを意味します。成績不良者を卒業させないことは、国家試験合格率（特に新卒合格率）を上げるための姑息な手段ではなく、大学としての当然の責務と思います。現在の卒業判定の申合せとして、卒業試験にひとつ以上の保留科目があり、かつ統合試験の成績が1・5のC未満の者は卒業させないことが医学類学生の手引にも明記され

第104回医師国家試験結果 ※（ ）内は第103回結果

	受験者	合格者	不合格者	合格率	全国平均
平成22年3月 卒業生	99名 (98名)	91名 (88名)	8名	91.9% (89.8%)	92.8% (94.8%)
平成21年3月 以前の卒業生	13名 (11名)	7名 (8名)	6名	53.8% (72.7%)	52.4% (54.3%)
合計	112名 (109名)	98名 (96名)	14名	87.5% (88.1%)	89.2% (91.0%)

ています。すなわち統合試験を国家試験合格率改善に生かすためには内規を変えなければならない、現在の申合せを厳密に適用するだけでよいこととなります。全く同様なことが四年次末の進級判定についても言えます。学科試験とC B Tの成績の組合せにより成績不良者を留年させるしくみが明記されているにも関わらず、昨年度もほぼ全員が五年次に進級し、以後は卒業試験までノーチェックという状態になっています。各科の授業の再履修が可能な四年次で留年させることは、卒業延期よりも有効な手段と思われま

す。成績不良者でも進級させ、卒業させた方がよい、中には運良く国家試験に合格する者もいるし、たとえ不合格になっても予備校等で勉強して翌年に合格すればそれでよいとする意見もあるようです。しかしそれは大学としての責任の放棄ではないでしょうか。私は多くの学生が留年するのがよいとは思いませんが、四年次末や卒業時の成績判定が厳しいという明確なメッセージを与えれば、学生が危機感をもって勉強し、結果として留年者や卒業延期者をそれほど増やさずとも合格率が上がるだろうと思っております。私はまた、本学がいわゆる国家試験対策授業を行う必要があるとは思っていません。四年次末の試験や卒業試験をより難しいものにし、またC B Tや統合卒業試験との組合せでより厳密な判定を行うことにより、本学を卒業できさえずれば国家試験にも合格できるようにすべきでしょう。本学はそういうレベルの大学であるはずだし、学生にはその力が備わっているはずだと思います。

# 医学部百五十年史のための覚え書【28】

## 馬島健吉の履歴と功業

寺畑喜朔

明治四年に金沢医学館教師として来任したスロイスの通訳として伍堂卓爾、武谷俊三とともに馬島健吉はその任に就いた。医学館における医学教育の裏方としての功績は大きく、顕彰する必要がある。今回は馬島健吉について、系譜、履歴、功業などにつき資料を示す。

馬島健吉(まじま けんきち) 天保十三年(明治四十三年(一八四二〜一九一〇))

大聖寺藩士。父礼造(全庵)は、もと越中氷見の神官佐山大和守の二男であったが、尾張馬島明眼院に学び馬島の姓を得、眼科医となり、天保三年大聖寺藩主利之より五人扶持を賜る。健吉はその長男。幼少より剛毅活発。東方芝山の教育を受け、大志を抱き安政六年大坂の緒方洪庵の適塾に医学を学ぶ。慶応二年長崎に至り、医学(内、外、産、眼科)のほか英、仏、独語を学び、同四年帰国。金沢



アムステルダムにおける加賀藩の留学生・1868年(明治元年) (向って左から赤星研造、武谷俊三、馬島健吉)

医学館教授兼通弁係を勤め、オランダより伴い帰った蘭医スロイスの片腕となった。翌五年医学館閉館後も津田淳三らと私費をもって三年間維持し、これを明治八年石川県病院後金沢病院とした。同病院医学教諭、同九年福井医学所教授のち福井病院長となる。明治十五年父の死により大聖寺に帰り、私立馬島病院設立。明治四十三年六十九歳で没するまで北陸三県医学の最高峰にあった。大聖寺実性院に葬られた。

◎健吉の父全庵は、越前武生の奥村良筑の門人(尾州馬島明眼院での修業時代以前か不詳)時代か、奥村は大聖寺藩主の眼病を治療し、その際藩医に推薦した(加賀江沼人物事典、江沼地方史研究会編、平成元年より)。

### 馬島健吉の履歴

- ◇天保十三年十月十八日礼造(全庵)の長男として大聖寺で出生長じて黒川良安の門下生となる。
- ◇文久元年十月三日、緒方洪庵塾に入門(姓名録五九三番)
- ◇慶応二年、長崎で医学修学
- ◇明治元年渡辺卯三郎らの推挙で和蘭留学を藩の補助を得て渡欧する(加賀江

沼人物事典)とある。

「伍堂卓爾一世紀事」には、慶応四年十二月加賀藩軍艦奉行稲葉助五郎大望ヲ企テ學生四名(神戸清右衛門、不破與四郎、黒川誠一郎、馬島健吉)ヲ率ヒテ英国龍動府ニ赴ク——とある。

註、馬島は和蘭国ユトレヒト町に滞在修学する。

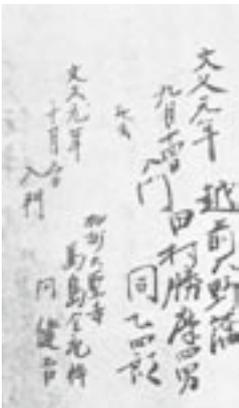
- ◇藩命により明治四年帰国する。明治四年一月和蘭から横浜に到着したスロイスと同行した可能性は高いが、それを裏付ける資料は未見。
- ◇明治三年金沢医学館開館とともにスロイスの医学教育の通訳係となる。
- ◇明治九年石川県福井公立医学所教授、同十四年福井県病院長となる。
- ◇同十五年馬島病院(大聖寺)建設
- ◇同十七年小松病院(小松)建設

以後、馬島は地方医界の要職につき、医療、衛生など多方面にわたり、多くの功績を遺した。

### 馬島健吉のオランダ留学

藩末期に藩命でオランダへ留学した馬島の記録は未だ発見されていない。ただ『伍堂卓爾一世紀事』(加越能文庫・金沢市立図書館蔵)に断片的な記述があるの

- ◇慶應四年十二月加賀藩軍艦奉行稲葉助五郎大望ヲ企テ學生四名(神戸清右衛門、不破與四郎、黒川誠一郎、馬島健吉



適塾姓名録 (593)

ヲ率ヒテ英国龍動府に赴ク——

◇明治二年五月二十九日伍堂はマルセル港に着く、六月二日マルセーユからリヨンを経てパリに着き黒川誠一郎に会う。六月六日ロンドン到着、稲葉、神戸、不破に会う(紀事より略述)。

◇今回携帯ノ二萬弗為換証書ヲ以テ學費継続ノ見込トス吉井氏ハ稲葉氏ト共ニ帰朝ノ精神ナリ 黒川誠一郎ハ佛国巴里府ニアリ 馬島健吉ハ和蘭国ユトレヒト町ニアリ、ユノ兩名ヲ倫敦府ニ呼ビ加賀藩學生五名(神戸、不破、黒川、伍堂、馬島)會合シテ此ノ事ヲ議シ——  
而シテ稲葉氏ハ吉井氏ト共ニ米國ニ涉リ太平洋ヲ經テ歸朝ス神戸不破兩人ハ倫敦府ニ止リ黒川ハ巴里府ニ歸リ伍堂馬島兩人ハ和蘭国ユトレヒト町ニ到リ各々修業ニ従事ス ユトレヒト町ニ到レハ馬島健吉ハ曾テ福岡藩醫學生武谷俊三同赤星研造ト同居ス余モ此ノ家ニ一時寄留スルコト凡ソ半ヶ月——



スロイスと医学館教師 (後列右より二人目馬島)

学生コーナー

「四年生の三月、今思うこと」

水戸守 真寿

「ターキーとマツジュンすこいな...」

去年の十月六日に発行された第一四三号の会報に掲載されている北崎君、今年一月十五日に発行された第一四四号に掲載されている松本君の文章を読んだ率直な感想です。彼らの類まれな文才もつて執筆された文章は、今回発行されます第一四五号十全同窓会会報学生コーナーの原稿のご依頼をいただいて今それを書こうとしている私にはかなりのプレッシャーを与えるものでした(読むんじゃない...)。小学校時代、夏休みの宿題の読書感想文ですら碌に書くことの出来なかつた私です。北崎君や松本君のように引き込まれるような内容の文章を書くことはできませんが、目を通していただければと思います。

今回、学生コーナーということで題目は『自由』。何を書いてもいいという内容でご依頼をいただきましたが、『自由』というものはなかなか困つたもので、無限に広がる道から一つの道を選ばなければいけない難しいものです。「子どもは無限の可能性を秘めている。」と昔からよく言いますが、子どもからしてみればその無限の可能性から自ら興味のあるもので尚且つ自分の素質に合うものを見極めて進まなければいけないうえに、選択した道が自らにとつてベストな道であつたかという答えもない、という何気に困難な道のではないかと思います。しか

し、その困難な道のりの先で何をするか、それもまた無限で、何を生み出すかも『自由』です。この原稿を執筆している現在四年生の私にもこの一年、二年の間どの科に進むのかという分岐点が続いています。五年生の一年間BSLで各科をまわらせていただき、自分が何をしたいのか、自分の能力を最大限に活かせるのはどこなのかを見極めたいと思います。どの科に進んで、そこで何を生み出すのか、はたまた何も生み出すことができないのか：自分でも楽しみます。

話はかなり脱線して何を言いたいのかわからない状態になっていますが、題目『自由』ということで、ここからは無難に「医学科四年生の生活を振り返って」という内容で書いていきたいと思います。

振り返ってみますとこの一年間は試験漬けの一年でした。来年度BSLで実習を受けるに値する人間性・手技を有しているのかをみるOSCE・その知識を持ちえているのかをみるCBTを含めこの四年生の間に延べ三十一回の試験を受けてきました。夏・冬・春の長期休暇を除いて約九ヶ月で三十一回、約八日に一回のペースで試験を受けてきたことになりました。常々四年生は試験一色で厳しい学年であるとは先輩方から聞いていたのですが、「まさかこれほどまでとは思っていませんでした。」というところが正直な気持ちです。しかし、聞くところによると、六年生の卒業試験は約二ヶ月間で三十科目以上の試験を受けるとか受けないとかが、二・三日に一科目のペースで試験があるとかないとか。ただ、その卒業試験を乗り越えなければ、卒業できないどころか、国家試験も受けることができず、

医師としてのスタート台にすら立つことが出来ません。今までの金沢大学医学部に入学するための入試勉強、入学してからの基礎系科目の試験・系統講義試験・臨床講義試験を潜り抜けてきた日々を思い出しながら卒業試験・国家試験に臨みたいと思います。

この原稿を執筆しています現在四年生である私の今の楽しみは来年度のBSLです。臨床の現場に足を踏み出す怖さもありますが、それ以上に教室で椅子に座りながらの講義や図書館で自学自習のさいに読む教科書からは得ることの出来ない、じかに患者さんと接することによって学ぶことができるという経験、医師を目指して入学してからのこの四年間、実際の臨床に触れることになつた私にとつて貴重な経験ができる楽しみのほうが大きいです。この会報が発行されるのは五月二十一日、BSLが始まって二ヶ月近くが経過しており、実際の臨床の難しさを思い知り、気持ちも低空飛行を続けている時期なのではないかと思えます(もしかしら、その難しさすら分らず右往左往しているかもしれない)。しかし、今のこの新鮮な気持ちをお忘れることなくいけたらと思います。

この一年を振り返って見たときに試験の他に思い浮かぶのは部活です。この金沢大学は他の大学に比べて部活に入部する学生が数多くおり、八割以上の学生が何かしらの部活に所属しているのではないかと思います。私もその学生の一人として現在競技スキー部に所属しており、主将を務めています。この原稿を執筆している三月現在にはシーズン真っ只中、二週間後の三月末には西医体が控えています。

競技スキーには色々な種類がありますが、私たち競技スキー部はアルペンスキーとクロスカントリースキーの練習を行なっています。アルペンスキーとは斜面に立てられた数十本のポール(旗門)を全旗門通過してタイムを競うもので、それに対しクロスカントリースキーとは一〇kmや一五kmといった距離を滑って走ってタイムを競うものです。金沢大学医学部競技スキーは意外と強豪で、ここ二十年三位以下になつたことがなく、黄金期には十連覇を果たすほど強いチームです。昨シーズンの第六十一回西医体では二年振りに総合優勝を果たしました。今シーズンは怪我人も多く出て厳しい戦いになるかとは思いますが、三ヶ月半というシーズンも残り僅か二週間となりました。今シーズンの目標はもちろん二連覇。BSLに向けて今読んでいる「MRIの読み方」・「疾患からみた解剖学」はひとまず置いておいて、最後の力を出し切りたいと思います。この会報が発行される五月には競技スキー部HPには二連覇の三文字が刻まれていると思えますので、一度HPのほうを見ていただければと思います。

題目が『自由』なだけに今思うことをただつらつらと書いただけの文章となつてしまいました。最後になりましたが、このような駄文を読んでもいただいた全ての方に感謝し、終わりたいと思います。

## 「明日の石川の医療を担う 若手医師の集い」開催

石川県では、石川県臨床研修推進協議会（県内の大学病院、臨床研修病院、県で構成）と連携して、本年二月七日、『明日の石川の医療を担う若手医師の集い』を開催させていただきました。この集いは、石川県内の大学病院・臨床研修病院の魅力を医学生に知ってもらうことにより、多くの医学生に県内で臨床研修を受けてもらうことを期待して開催するものであり、昨年度に引き続き二回目の開催となっております。本年度は、医学生約百人、研修医・指導医等を含めて約二百人の方にご参加を頂くことができました。金沢大学からは、山本健先生、中村裕之先生にご参加いただくとともに、吉崎智一先生、舛田英一先生をはじめとする卒後臨床研修センターの皆様からは金沢大学附属病院の研修体制などについてご説明頂きました。

今回の集いでは、県内十二ヶ所の大学病院・臨床研修病院から各病院の指導体制や研修プログラムの特徴などを紹介いただくとともに、文部科学省高等教育局医学教育課の新木一弘課長から「医学教育の現状について」と題する講話を頂きました。また、大学病院・臨床研修病院ごとに個別相談のためのブースを設けて頂き、各病院の指導医・研修医の方々に、参加した医学生からの相談に応じて頂きました。さらに、「石川県女性医師支援センター」（石川県医師会）の関係者により個別相談を行って頂いたほか、県からは各種の子育て支援情報や修学資金制度

などの情報提供をさせて頂きました。

今春採用された県内の研修医数は九十七名であり、関係者のご尽力により、従来に比して増加しています。県としては、こうした傾向を維持していただけるように、集いの参加者に対して「石川県地域医療人材バンク」への登録を依頼しており、今後、登録頂いた方々に対して、県内の大学病院・臨床研修病院の病院実習・病院見学の案内などをメールなどにより発信していくこととしています。

県といたしましては、金沢大学十全同窓会の関係者の皆様のご協力を頂きながら、県内の研修医の定着、地域医療の確保に努めていきたいと考えておりますので、引き続き、ご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願いいたします。

なお、当日の様子など詳細は、県のホームページに掲載させて頂いておりますので、ご参照頂ければ幸いです（<http://www.pref.ishikawa.jp/iryousupport/>）。

（石川県健康福祉部地域医療推進室

木村 慎吾 記）



## 謝恩会

去る三月二十三日、金沢ニューグランドホテルに於いて、平成二十一年度卒業生による謝恩会が執り行われました。ご多忙の中多くの先生方にご出席いただき感謝しております。先生方と落ち着いて話すことを重視したため、円卓の着席式で一回席替えを入れるという形式にしました。

医学部附属病院長富田勝郎教授の乾杯の挨拶で始まり、退職される富田勝郎教授への花束贈呈に続いて、医学部長金子



周一教授よりご祝辞をいただきました。しばし歓談の後、大変お世話になった清水徹教授より懐かしい思い出がたくさん詰まったお言葉をいただきました。会場には様々なことがあった学生生活のスライドも紹介され、充実した沢山の笑顔がありました。六年間という長い間苦楽を共にした同級生たちこそ間違いなく今後の人生の宝です。卒業生代表の山崎厚郎の挨拶、山岸正和先生の一本締めにて閉会いたしました。

最後になりましたがご指導くださいました先生方、様々な面で支えてくださった学校関係者の方々に、深くお礼申し上げます。ありがとうございました。

（金沢大学謝恩会委員長

安本 高規 記）

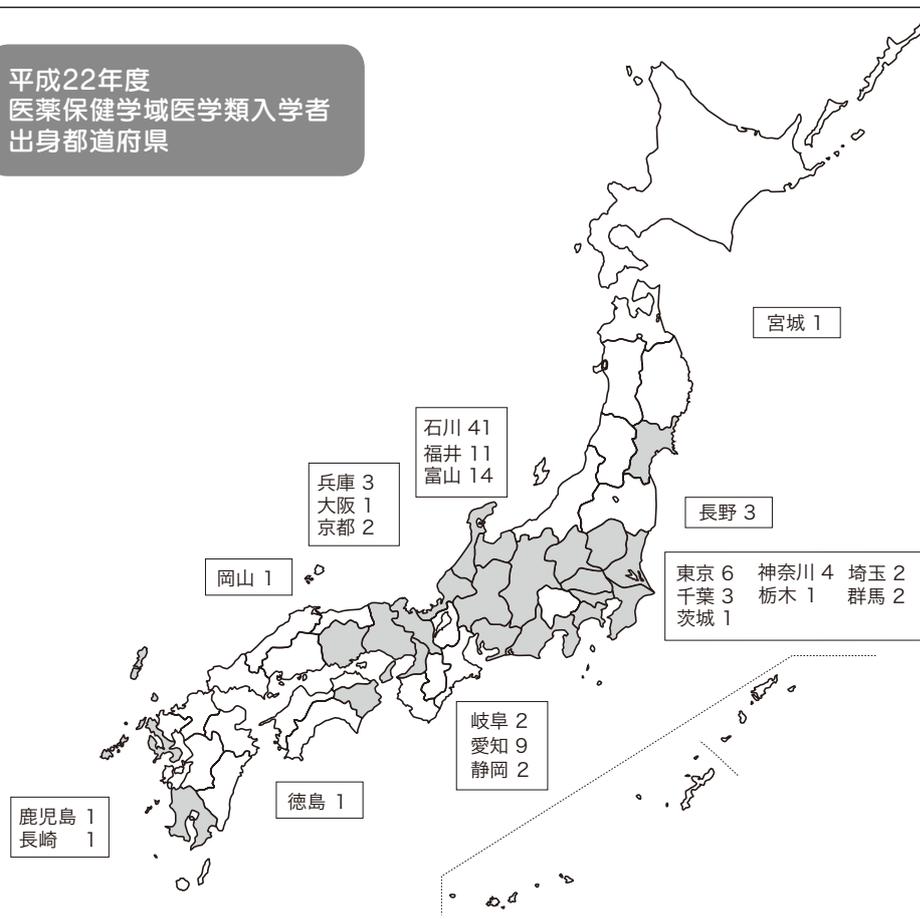
## 平成二十二年三月卒業生進路

会田 泰裕	金沢大学附属病院
赤谷 憲一	福井県立病院
阿河 光治	金沢大学附属病院
阿部 健作	金沢大学附属病院
天野 真也	
池辺美奈子	富山県立中央病院
石橋 玲子	金沢大学附属病院
井美 達也	
岩本 大旭	金沢大学附属病院
上田 忠弘	奈良県立医科大学附属病院
上田 秀保	金沢大学附属病院
大石 正博	金沢大学附属病院
大島 健史	金沢大学附属病院
大橋 文平	国立国際医療センター国府台病院
大平 亜希	
大森 隆昭	東京医療センター

岡崎 雅樹 国立病院機構名古屋医療センター  
 岡島 幸紀 信州大学医学部附属病院  
 置村 杏奈 香川小児病院  
 奥出 輝夫 厚生連高岡病院  
 小倉 央行 富山県立中央病院  
 尾崎 猛智  
 尾崎 太郎 みやぎ県南中核病院  
 小田桐康太 富山県立中央病院  
 織田 典明 金沢大学附属病院  
 片山 恵 金沢大学附属病院  
 加納 俊輔 金沢大学附属病院  
 上関 ふみ 金沢大学附属病院  
 岸川 正大 東京医科歯科大学附属病院  
 北畑 将平 自治医科大学附属病院  
 工藤 貴子 大阪市立総合医療センター  
 熊井 達男  
 倉田 徹 金沢大学附属病院  
 小林 英士 金沢大学附属病院  
 五天 千明  
 齋藤 七生 金沢大学附属病院  
 佐伯 総太 江南厚生病院  
 坂下なつみ 金沢大学附属病院  
 佐藤 晃一 黒部市民病院  
 島田 摩耶 富山県立中央病院  
 下村 修治 金沢大学附属病院  
 鈴木 健一  
 鈴木 知秀 神戸大学附属病院  
 須田 烈史 金沢大学附属病院  
 藏島 乾 国民健康保険小松市民病院  
 高木 知治 金沢大学附属病院  
 高田 泰史 金沢大学附属病院  
 高田 美沙 福井県済生会病院  
 高橋 直樹 金沢大学附属病院  
 武居 亮平 金沢大学附属病院  
 竹下 健一 君津中央病院  
 伊達 勇佑 金沢大学附属病院  
 田中 綾 安城更生病院

手島 太郎 市立砺波総合病院  
 百々 秀彰  
 中井亮太郎  
 名倉 慎人 金沢大学附属病院  
 南部 育 金沢大学附属病院  
 西田 沙貴 金沢大学附属病院  
 野嶋 孝則  
 橋本 政史 高岡市民病院  
 濱岡 卓人 東京大学医学部附属病院  
 濱田 翠 茅ヶ崎徳州会  
 濱屋 圭 虎ノ門病院  
 林 恭乗 大垣市民病院  
 福田 哲也  
 前田 隆志 金沢大学附属病院  
 前田 有香 金沢大学附属病院 小児科特別プログラム  
 正村 友菜  
 松井 崇生 福井済生会病院  
 松浦伸太郎  
 松川 弘樹 金沢大学附属病院  
 松島絵里香 金沢大学附属病院  
 松田 裕介 金沢大学附属病院  
 真弓 卓也  
 三井 洋明 洛和会音羽病院  
 皆巳 彩  
 南 三郎 洛和会音羽病院  
 南 卓馬 洛和会音羽病院  
 村井 亮介 神戸市立医療センター中央市民病院  
 村岡 正裕 金沢大学附属病院  
 村瀬 篤史 大垣市民病院  
 安田峻一郎 東京医科歯科大学附属病院  
 安本 高規 金沢大学附属病院  
 山内 博史 金沢大学附属病院  
 山崎 厚郎 福井県立病院  
 山田 真平 金沢大学附属病院  
 山田 直樹 横浜栄共済病院  
 山田 豊 相沢病院  
 大和 雅敏

平成22年度  
 医薬保健学域医学類入学者  
 出身都道府県



山村 雄太 富山県立中央病院  
 山本 崇史 金沢大学附属病院  
 山本 大樹 金沢大学附属病院  
 吉田 明人 淀川キリスト教病院  
 米澤 則隆 金沢大学附属病院  
 米島 淳 聖隷横浜病院  
 米田 詩織 福井済生会病院

若林 豊 千葉大学医学部附属病院  
 脇田 重徳 愛知県厚田農薬協同組合連合会安城厚生病院  
 (五十音順)  
 (進路については本人の同意のもとに記  
 載しています。編集委員会)

## キンストレーキ 平成の修理完了

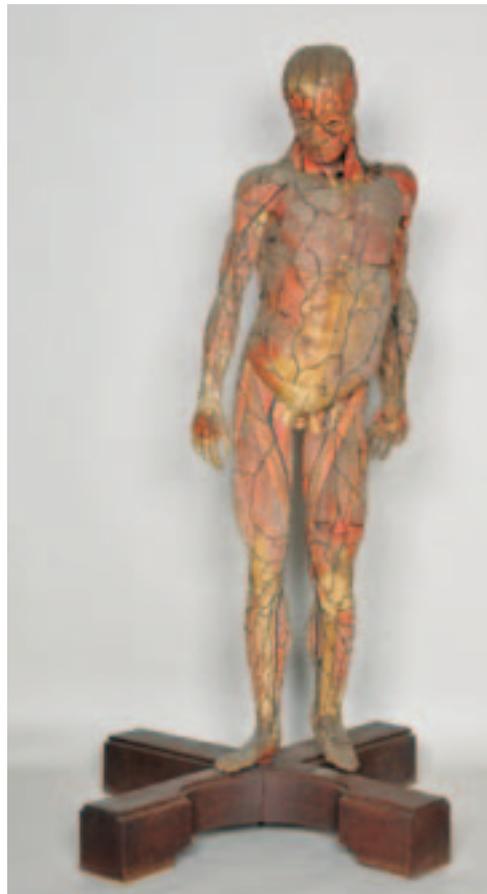
平成二十二年三月二十九日、修復成ったキンストレーキ (Kunstliki) が帰学した。キンストレーキは、フランスの解剖学者ルイ・トマジェローム・オズー (Louis Thomas Jérôme Auzoux 1797-1880) によって製作され、明治元年 (一八六八年) 黒川良安が加賀藩の命をうけ長崎で購入した分解・組立て可能な紙塑人体模型である。わが国に現存する男性体三体のうちもつとも保存状態がよいとされていたが (他二体は長崎大学と福井市・福井市は女性体一体も所蔵)、長年に亘る埃の付着、カビの発生、彩色顔料の剥落等による損傷著しく、崩落の危険性も高まっていたことから、平成二十年十月来、(財)美術院国宝修理所にて修理中であった。中村信一学長のご高配により、金沢大学特別事業費一五、八一三千円の支援をうけた。美術院国立奈良博物館工房古谷健治修復部長と入谷直技師が一年半の歳月をかけ、全パーツを修理。燻蒸の過程も経て、同修理所から大学に納入された。今回の修理は、金子治郎伸介、今田東の指導の下に東京北川工作場で補修費二百円をかけて行われた明治十五年の修理以来のことで、正に平成の大修理となった。本学のキンストレーキは長らく一八四〇年モデルとされていたが、今回調査に協力いただいた順天堂大学月澤美代子准教授によれば、一八五七年モデルと推定されるという。左眼と男性器の大半が失われており、現存パーツ数は

八十八、ラベル数は一、五五一枚である。同型モデルが英国アバディーン大学に現存していることも判明した。キンスト

レーキは今後、角間キャンパス資料館での特別展示を経、宝町キャンパスの医学部記念館一階資料室に移される。来る七月三日 (土) 開催の十全同窓会総会の折には同窓会のご支援により新調される恒湿陳列ケースに収められて披露される予定である。同窓会のご援助に厚く御礼申し上げます。 (山本 博 記)



修復後



修復前

### 編集後記

桜の候となり、会員の皆様には新年度への新たな取組みや計画にお忙しい日々をお過ごしのことと存じます。第一四五号の同窓会報が刷り上がり、お届けできることになりました。本学も四月一日より松井修新医学系研究科長、井関尚一新医学類長を迎え新しい体制がスタートしました。難問山積みの折、両先生の御活躍と手腕を期待しています。また、古川副学長、山本博研究域長、富田勝郎病院長には引き続き大学、研究域、病院の運営の舵取りをお願い致します。新しく教授に御就任された三浦克之、土屋弘行両先生には御存分の活躍を祈念しています。

さて、医師不足の対策として、本格的な医学部入学定員増を迎え、本学も本年度定員一七名とふくらみました。地域枠の定数も増えました。(ちなみに石川県出身学生は四十一名と大幅アップしました。北陸三県出身学生は半数を超えました。) 各大学色々な工夫を実施し優秀な学生の確保に努めています。初期研修制度の見直しなども視野に入れ、より地域に根をおろした医学・医療人の養成が求められています。なお詳しくは、本号金子先生の論説をお読み下さい。医師不足や専門分野の偏りについて会員皆様の積極的な御意見、御高識をお寄せ下さい。去る三月二十九日キンストレーキの大修復が終了し、小生も納入を見学させて頂きました。全国四体のうちの一体で最も保存が良いものと聞いています。明治元年、黒川良安先生の御購入から正に一五〇年、本学開学と時を同じくし歴史を刻んできました。我々同窓生の大切な寶です。記念館に展示されますので、是非御一見下さい。

(加藤 聖 記)